

---

# CINDERELLA

イズル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

CINDERELLA

### 【Nコード】

N2884F

### 【作者名】

イズル

### 【あらすじ】

ずっと男に間違えられながら生きてきたジュン。女の子っぽいことには興味がない、恋愛だっただけのことがない。そんなジュンが、23歳にしてとうとう初恋をした。しかもそれは、いきなりの同棲。男だと思われながら好きな相手と同棲するジュンだが…。

## 01: ばれちゃいけない秘密（前書き）

ちょっとポップでラフな感じの小説です。  
ラフに読んで頂ければ嬉しいです。

## 01: ばれちゃいけない秘密

兄貴が住んでいたアパートに転がり込んだのは数ヶ月前のこと。

アパートといっても2LDKで結構良い感じの部屋なんだ。

兄貴と一緒に住むってのもどうかと思ったけど、仕事先はこっちにあるし、家を探す手間も省けるし、なんて思ってたんだ。

ところが、俺が来てから兄貴はさくつと家を出ていくことを宣言した。まあ別に寂しいわけでもないし、むしろラッキーってくらいの話なんだけど。当の兄貴は、彼女と同棲するんだなんて嬉しそうに言ってたけど、要するに彼女の家に転がり込むってことなんだ。俺と一緒に。

そんなわけで、快適な2LDKは俺のものになったんだけど、面倒だからって言って、名義は兄貴のままになってる。家賃は兄貴を通して俺が払うってことになって、今に至ってるわけだ。

まあそれは良い。それは良いんだ。

問題は、やっと快適になったはずのそのアパートに、今度は同居人がやってきたってことなんだ。

ことのはじまりは数週間前。

久々に兄貴から連絡があって、一体何かと思ったら、

「一日だけでいいから友達泊めてくれ！」  
という事情だったわけだ。

仕事から帰ってくるのも遅いし、一日だけだったらまあ良いか、なんて思っただけでOKしてしまったら、あろうことかソイツは、そのまま家に居座るようになってしまったんだ。

最初の夜。

仕事から帰ってくるとドアの前に男が立ってて、ああ、こいつが例の友達か、なんて思ってた。勿論、違う部屋に収納だ。で、朝起きたらもう既にソイツはいなくて、兄貴から電話がかかってきた時は「もう帰ったよ」と問題なく答えたのだが、その夜になってまた男がドアの前に立っていたというわけ。

挙句の果てには「同居させてくれ」ときたもんだ。

まったく呆れるやら何やら…。

本当だったら兄貴に連絡して、こんなわけのわからん状況とはおさらばって言うのが当然なんだろう。多分そうなんだ。でも、俺はそれをしなかった。というか、そうしなくなかったんだ。

だって、一目ぼれだったんだ。

いや、違うか？

最初の夜はなんとも思わなかったから、二目惚れかな？  
まあどっちでも良いや。

とにかく、俺はその男に惚れてしまったわけだ…だから、兄貴には内緒で同居をし続けてるってわけだ。幸い、同居人は兄貴とそれほど連絡を取ってないらしくて、最初の日の夜はたまたま連絡を取ったというだけだったらしい。

兄貴には絶対に言えない。

それどころか家族にだって言えないよ。

いや、友達にも言えないかも…。

だって、こんなことを言ったら馬鹿にされるに決まってるんだ。それを分かっているから言えないし、ぶっちゃけた話、自分でも自分のことを気持ち悪いとさえ思ってる。

でも…あいつを見てるとドキドキするんだ。

ドキドキなんて乙女が使う言葉だろうが！って思うけど、本当にそうなんだから仕方が無い。認めたくないけど、体が勝手にそうなってるんだ。こんな気持ちになるのは、もしかしたら生まれて初めてのこともかもしれない。

俺は、こんな自分の気持ちすら、誰にも言えないんだ。

毎日毎日、秘密ばかり持ってる。

秘密を抱えたまま、このアパートにいる。

だけど秘密がバレたら、あいつの傍にはいられない。それに、あいつは俺を軽蔑するんだと思う。こんなヤツが俺を好きなのかよ？って。

それは嫌だから…だっ たらせめて傍にいれば良いかな、なんて思 ってる。

バレちゃいけない。

バレちゃいけないんだ。

あいつのことが好きだということも。

そして…俺が女だっていうことも。

## 02：男の子、女の子

『あんたは女の子なんだから、自分のことは「私」と言いなさい！』

そう何度も親に叱られてきたけど、俺は一向にそれを守らなかった。学校にいるときでさえ俺と言い続けてきた。

自分のことを「僕」と呼ぶ女の子もいるけど、俺は「俺」派で、それはどっちも同じようなものだと思う。それなのに「俺」派の俺だけがそう言われるのは何だか納得いかないもんだ。

昔から周囲は、俺のことを良く男と間違えた。

顔も男っぽいし、背も170センチくらいあるし、声も低めだし、スカートなんかは一度もはいたことがない。高校は運良く私服校だったから、いつもパンツスタイルで登校してたし、まるで嘘みたいに胸もないからノーブラでも問題ないってくらい。

兄貴のアパートに来たときも同じだ。

回り近所は兄貴の「弟」が移り住んだと思っただらしくて、俺のことを「お兄さん」と呼んだ。それは未だに変わらない。何故って、俺が女だったことには誰も気づかないし、疑いもしないし、俺も訂正なんかしないからだ。

男だと思われても、さしたる問題ってものはない。  
むしろ外にいるときのほうが「えっ」っていう目で見られる。

トイレなんかは顕著だ。

俺も出来れば本当に男として生まれてきたかったけど、残念ながら肝心なもんがついてないから女として生きるしかない。だけど俺には、普通の女の子がやっていいるようなお洒落とか女の子っぽい趣味とか、やっぱりついていけないんだ。

当然だけど、兄貴は俺が女だっていうことを知ってる。

それなのに、アパートに男友達を泊まらせてやってくれ、なんて言うてくるんだから、世間的に考えたらこれはありえない話なんだろう。けどウチでは問題ない。だって俺は男だと思われてるから、相手が男だろうが、変な気なんか起こすこともない。つまり、間違っても「過ち」なんてことは起きないわけだ。

そんな俺が、男に惚れた。

たまたま、偶然、泊まりに来た男に。

俺は今でも何だか信じられないんだ。

今まで「こいつってすごいな」とか「かっこいいな」って思うことはやっぱりあったけど、こんなふうにドキドキなんてしたことはなかった。それなのになんでこんな気持ちになったんだろう。

俺よりも高い背。

多分180センチ以上はあるんだろうな。

ちょっと長めの金髪で、その日はふちの無い眼鏡をかけてた。

黒のシャツを着てたっけ。よれよれのじゃなくて、ぴしつとした感じの、黒のシャツ。で、ズボンも黒だった。

チャラ男に近いような雰囲気なんだけど、チャラくは見えない。近寄りかたそうなイメージなのに、意外とすぐに笑ったりするんだ。その笑顔が、何だか本当に嬉しいって感じの笑顔で、営業スマイルに慣れてる人なんかとは絶対的に違ってた。

一見細く見えるけど、実は単に着やせするタイプらしくて、案外としっかりした体型をしてる。いや、さすがに素っ裸なんか見たことないけど、ラインで何となく分かるカンジ。

はませあかね  
浜瀬赤瀬。

それがアイツの名前。

アカネって名前が女っぽいから、名前だけだとすぐに女と間違われるんだと言ってた。俺と正反対だなんて思ってたちょっと面白かった。勿論、アカネの場合は姿を見ればすぐに男だって分かるから、俺とはだいぶ違うんだけど。

アカネは本当にカッコイイ。

何をやってても様になるし、月並みだけど優しいし、きっとアカネはモテるんだろうなと思う。もしかしたら彼女がいるのかもしれない。こんだけかつこよかったら彼女がいて当然だと思う。

だけど、できればいなければ良いなと思ってる。

まさか俺みたいなヤツがアカネと…なんてこと絶対に絶対はないと思う…けど、なんていうかこう…。

多分、彼女なんて見たらすごいショックを受ける。  
寝込むかもしれない。

そんなことを考えてアカネと暮らしてる俺は、毎日毎日楽しいけど、ドキドキしっぱなしで心臓がすごく疲れるんだ。

アカネが傍に来ると緊張する。

アカネは俺のこと男だと思ってるから何の気なしに近づいてくるし、時々なんかは俺の部屋で寝ちやうことだってある。

よくよく考えると、一緒に住んでるってすごいことなんだよな…。

だけど、こんな生活、いつまで続けられるんだろう。

元々兄貴のアパートなんだし、いつかアカネはいなくなっちゃうかもしれない。そのとき俺は、どうすることもできないんだろう。だからせめてそれまで、アカネの傍にいたいって思うんだ。

俺は、ある大型雑貨店の契約社員をやってる。

全国規模のおっきな雑貨店だ。

学生のとときにアルバイトをしてて、そのまま契約に上がったただけなんだけど、やっぱり慣れてる職場は楽だと思う。ただ、代わり映えはしない。

二年に一度くらい、マンネリ化を防ぐための改装というのをする。そうすると店舗の雰囲気ガラツと変わるんだ。そのときくらいかな、代わり映えするのは。あとは、人員が出たり入ったり。

バラエティショップ風になってるウチの店舗では、一角に化粧品が売ってる。国内有名メーカーとかじゃなくて、輸入品とか、あとは無添加物を売りにしてるようなやつだ。

こういうのは売ってるところが少ないから、顧客が良く来るんだ。毎月買いに来るOLや主婦が多い。俺はそれをレジ通しながら、へー、一ヶ月で化粧品って終わるもんなんだ、なんていう感想を抱く。

「化粧品って種類がたくさんあるよな」

俺にはいまいち分らない。

安物の、さっぱりした水みたいなやつを顔につけてるだけだし、化粧なんて無縁だし。

「園部さん、これ社割で買いたいんですけど」

「あ、了解！」

ウチのバイトのユリちゃんは、このコーナーの担当をしてて、いつも仕事中に商品をチェックしてる。といっても仕事をサボってるわけじゃないから問題はない。それに彼女は化粧品が好きらしくって、知識も結構持つてるんだ。

ユリちゃんは可愛いから、化粧品とかが似合う。

こんな可愛い子だったら、男なら付き合いたいって思うんだろうなあ。

俺はそんなことを考えて、ふとアカネの顔を思い浮かべた。

…って！

オイオイ、アカネは関係ないだろ！なに思い出してんだよ！

俺は急に恥ずかしくなって、目の前のユリちゃんが俺の心を読んだんじゃないかって心配になって、焦って話題を繰り出した。

「あ、ああと、あのさ！ユリちゃん、化粧品詳しいじゃん！？最近どんなの流行ってるのかな！？」

「やだ、急になに言ってるんですかー園部さんってば。売り上げプルーフ見れば一目瞭然じゃないですか」

「あ、そっか！あはは、そーだよなー。なに言ってるんだ俺！」

…俺はバカか？

あゝもうホント…アカネが頭から離れない。どうにかしたい。

「あ、でもね、私のお勧めがありますよ。たとえばこれとか、すごく良かったですよ。ぷるるんがずっと取れないの。香りもいいし、味も変じゃないし、あんまりベタつかないんです」

「へえ」

それはグロスだった。唇に塗るキラキラ光ってるやつだ。ユリちゃんはどうかやらいち早くこれを買って使ったらしい。

「園部さんもつけてみてくださいよー絶対良いですから！」

「は！？俺！？ばっか、俺はそんなんつけるわけないっての」

「えー。でも園部さん、好きな人とかいないんですか？」

「す、好きな…」

やばい…。

俺の頭にはまたアカネがぷわっと浮かんでくる。

嬉しそうに笑うアカネの顔。言葉が聞き取れなかったとき、「え？」

って言って少し上半身を折り倒して俺の顔を覗き込んでくる、あの時の顔。

好きな…人…。

「園部さんの好きな人ってどんな人ですか？」

「ばっ！だ、だからそんなのいないってば！」

「えー」

女の勘って怖い…あやうくユリちゃんにバレるところだった。あぶないあぶない。俺に恋愛ごとなんてちつともイメージじゃないし気持ち悪い。こういうのは秘密にしとくもんだ。

俺はユリちゃんが欲しいといった商品を社割りでレジ通しして、今日は退勤時間になったユリちゃんにお疲れさまを言った。

ユリちゃんが買ったのは、ローズの香りがするとかいう化粧水だ。世の中にはこんなものもあるんだな。何でも、その化粧水をつけるとローズが漂うらしい。

匂いか…。

そういえば、アカネはいつも良い匂いがするんだよね…。多分香水だろう。なんていう香水かな。

爽やかな感じの、男っぽい匂いだ。涼しいカンジがするやつ。たまにふわって香って、すごい良い匂いなんだ。

そういえばウチの売り場にも香水が売ってたな、と思って、俺はふらふらと香水売り場に足を向けた。

ショーケースの中にはいっぱい香水があって、どれがどれだかさっぱり分からない。ユリちゃんに聞けば良かったかな。ああ、でも売り上げプルーフ見れば売れてる香水は分かるんだよな。

でも、アカネの香水がどれかなんて、プルーフには載ってない。

「園部ー！サッカー頼むー！」

「あ、はい！」

レジ応援を呼ばれて、俺は慌ててレジに走った。

家に帰ってアカネがいないとホツとする。  
緊張する時間が少なくて済むから。

アカネの部屋を覗いて、荷物があるとホッとする。  
アカネはここに戻ってくるんだって分かるから。

自炊なんてものにも縁が無い俺は、いつもコンビニで弁当かカップ麺かパンを買ってきて食べてる。それか、外で済ませてくる。

アカネもそれと同様で、大体家に帰った後は何も食べない。

だからウチの冷蔵庫のなかには、いつ買ったんだか分からない卵と牛乳、あとはまとめ買いのビールがあるだけだ。因みに卵は、いつだったか自炊に挑戦してみようと思ったときに買ったやつだ。結局残ったまま放置されてる。

彼氏の家にいつて食事を作って…なんて話を聞いたりするけど、やっぱり男ってそういうのが好きなのかな。アカネもそうなんだろうか。

俺が見るとき、アカネは大概酒を飲んでる。ほとんどビールで、たまにウイスキーの水割り。結構飲むペースが速いの、アカネはへべれけになったりしない。酒は強いんだ、とか言ってたっけ。

俺は酒があんまり飲めないから、アカネと同じペースでは飲めない。それがちよつと残念だと思う。

「はあ…」

まあどっちにしろ、食事を作るとかなんとか、俺には出来ないことだ。というか、やったとしても気持ち悪いだけだろうし。

TVを付けると、女物の下着のCMがやっていた。

胸の谷間を作るボリュームUPブラとかいうやつだ。海外の、めちやくちやスタイルのいい女の人がモデルになってる。確かに胸のボリュームがすごいけど、これはそもそもモデルの胸がデカいんだと思うような気も…。

CMでは、売り上げが伸びているというように言ってる。

そうか、世の中の女の子はそういうことにも興味があるわけだな。

小学校のとき、性教育の時間つてのがあって、不本意だけど女だった俺は、女の子だけ保健室に呼び出さるあの異様な雰囲気の中に一応は混じってた。

生理が始まりますよ。

胸が膨らんできますよ。

そんな話をされた。

確かに生理はきたけど、胸は板みたいなままだから、やっぱり俺はどっかおかしいのかもしれない。ホルモンのバランスとかいうのが変なんだろうか。

生理の時には仕方なく生理用ショーツとかいうのをはいてるけど、普段はトランクスをはいてる。それが慣れちゃったから、今でもずっとそのまんま。さして問題は無い。

ブラはほとんどの場合してない。たまにするけど、そういうときでもスポーツブラだ。ワイヤーが入ってない、ペによペによのやつ。

それでさえ俺は窮屈だと思ってる。

下着ね…。

やっぱり男って可愛いブラとかつけてるほうが…とかいうことを考えて、俺は思わずハツとした。だめだだめだ！これは絶対に、最終的にアカネにいきつく思考パターンだ。

男ってそうなんだろうか？じゃあアカネも？

いつもそんなことを思ってしまう。

それで、ちつともそれに合っていない俺についてを考えてしまう。どうせ無駄だと分かっているのに、何故こんなことを意識してしまうんだろうか。

「はあ…」

俺は冷蔵庫から牛乳パックを取り出すと、パックのままゴクゴクとやった。

こんな俺には、やっぱり「男」が似合ってる。

そくに違いはないんだ。

### 03：絶対勝てないこと

アカネが帰ってくるのは夜遅くだ。

一応はまだ俺がおきてる時間に帰ってくるけど、大体顔を合わすのは少しか。それで次の朝は俺より早いんだから、本当にアカネはすごいって思う。そのくせ疲れた顔なんてまるで見せない。

そういえば俺は、アカネがなにをしてるのかを知らない。

どんな仕事してるのかとか。

どんなことに興味があるのかとか。

帰ってきて少しか共有してる時間は、大体世間話をしてる。でもそれは、仕事内容が特定できるようなことじゃなくて、職場のやつがこうこうでさ、とか、今日電車の中でこんなことがあってさ、とか、本当にどうでもいいことだった。

アカネを好きになるにつれ、俺はアカネのことが知りたくなって仕方なくなってた。

どんな仕事してるのか、どんなことが好きなのか、それにあの香水はなんてやつなのか、それに…どんな女が好きなのか…。

けど、それを切り出すのは勇気がいった。

本当は何でもないことなんだろう。ただ普通に聞けばいいだけの話なのに、好きだって自覚し始めてから、俺はドキドキしっぱなしで普通のことにさえいちいちドキドキしてたんだ。

だから、ようやくそれを切り出せたときには本当にどっと疲れた。

「そつえば…さ。アカネってどんな仕事してんの？」

「ん？仕事？言ってなかったっけ？」

夜遅く帰宅して、即効でシャワーを浴びたアカネは、あろうことに上半身に何もつけないまま肩にバスタオルをしょってビールを飲み始めた。

ちょ…目に毒だから！

ドキドキして仕方ない。

…というか、マトモに見れない。

それでも不意打ちで目に入ってしまったりと、しっかりと筋肉のついた腹とか肩とか二の腕とかに俺は死ぬほどドキドキした。

うわー…マジに男だ…。

当たり前なんだろうけど、外見だけ男に見える俺とかとはやっぱり違うんだって思い知らされる。俺は肩幅あるほうだけど、アカネはもつとある。当たり前か。その上背も高いし、体のバランスもいいし…やっぱ目に毒だ…。

濡れてて乾いてない髪…こういうのをセクシーっていうのかな。

「多目的ホールのスタッフやってる。裏方な。大荷物運んだり、セツトしたりすんだよ。たまに客案内したりもするけどな」

「へえ、だからか…」

「だからって何が？」

「あ！いや、なんていうかその、筋肉ついてんなーとかって思ったから！」

俺が慌ててそう言うと、アカネは、そうそうそうなんだよ、とあの笑顔で笑った。

やばい…一撃ノックアウトだ…。

というか服を…服を着てくれ…！

「で、でもさ、ホールってそんなに遅くまで仕事あるんだ？アカネっていつも帰ってくるの遅いじゃん！？」

「あ、それはな。ちょっと事情があるんだよ。仕事自体もまあまあ終わるの遅いんだけど、俺重鎮じゃないしな。仕事上がった後、この近くのスタジオに寄ってるんだ」

「スタジオ？」

俺はようやくアカネの仕事やら趣味やらを知ることになった。

どうやらアカネはバンドをやっているらしい。なるほど、だから金髪なんだなって、何だか変に納得した。

スタジオというのは練習のスタジオのことで、なんでも友達の親が経営してるんだとか。だから楽器はいつもそこにおいてあって、ただで練習させてもらってるらしい。

「バンドかー。なんかアカネに似合ってるな」

ますますモテそうだよ…。

だって、ミュージシャンって大概モテるもんじゃないか。ただでさえモテそうなのに、さらに音楽をやってるなんて、これじゃあ俺なんかカスだ。

「練習に使える時間少ないから、本当にもう地道なもんだぜ。でもさ、そろそろバンドも軌道に乗り始めてきてるし、いろいろ考えなきゃなとは思ってるんだ」

「え？考えるって何を？」

「んーまずは仕事かな。今の仕事だと時間が足りないから、もつと短時間で稼げるものを探さないかって思ってるんだ。まあそんなにうまい話はないだろうけどさ」

「え、じゃあアカネのバンドって結構人気あるんだ？」

「んーどうかな？」

アカネはどうかな、なんて言ったけど、俺の予感では人気がありそうだ。だけど俺はそういうのにも無縁だから、いまいち詳しいことが分からない。

なんていうバンド？

そう聞いたら、アカネはライブに誘ってくれた。

なんとかR a i nって名前らしい。

そのなんとかの部分聞いたことない単語でいまいち覚えられなくて、聞き返すのも何だかなと思って結局そのままになってしまった。

「都内のライブハウスなんだけど、そこでやるのラストだからさ。良かったら見に来てくれよ。チケットがあっただはすなんだけど……」

アカネは一旦部屋に戻ってゴソゴソやると、四角い紙切れを持ってリビングに戻ってきた。相変わらず服は着てないままだ。

「これ！ま、来れなかったら捨てていて良いからさ」

行く！

絶対行く！

俺は猛スピードで頭ん中に入ってるシフトを取り出して都合をつける手段を考えてた。せつかくの機会なんだ。せつかくアカネが誘ってくれたんだ。絶対に行きたい。なんとしてでも行きたい！

「あ、もし来れたらさ、見るときはしもてな」

「しもて？」

「客席から見たら左側かな。俺、そっちに立ってるから。俺の勇姿を見てやってくれよ。かつこいいぜー。なーんちゃって、嘘嘘」

アカネは笑いながらそう言う。

俺は心の中で、最後の嘘嘘の部分を、本当本当、と言いなおしてた。

ウチの職場には、結構個性的なスタッフが多い。

ユリちゃんなんかは普通っぽいけど、それ以外にも、カメラ小僧みたいなヤツとか、ゲームマニアみたいなやつとか、大食いの女の子

とか、雑誌の読者モデルをやってる子なんかもいる。

「アイちゃんさ、バンドの追っかけしてんだっただよな？」

「うん、してるよー。あ、園ちゃん、この前の休み希望大丈夫だったかなあ？超好きなバンドのライブなんだよね。しかもツアーファイナルでー」

アイちゃんは、バンドの追っかけをしてる女の子だ。

好きなバンドがいくつかあるらしいけど、そのうちの一つが本命で、本命バンドのライブには全部行くのが当然らしい。そのおかげで、アイちゃんのシフトはすごく不規則なんだ。がつつり出たと思ったら、がつつり休む。いつもお金が足りないとはやいてるのはチケット代と旅行費で飛んでいってるからだとか。

「あのさ、なんとかRainってバンド知ってる？」

「なんとかRain？んーと…えーと…あ、もしかしてアレかな。  
Gloomy Rain」

「グル…？それって、その、結構有名なカンジ？」

「んーまあまあ有名かな？最近雑誌とかにも載ってるしー」

雑誌に！？

なんだそれ！やっぱり人気なんじゃん！？

何だよ、アカネ、どうかなーとかなんとかいってたけど、やっぱり人気なんだ。

アイちゃんの情報だと、最近はチケットが売り切れてるらしい。アイちゃんの友達がファンなんだとか。

…っというか。

アイちゃんの友達のことには知らないけど、一応はそんな近くにアカネのバンドのファンがいるわけだ。俺はそんなアカネを好きになつて、一緒に住んで…。

なんか、ファンに知られたら俺は殺されそうな気がする。

俺が悶々と好きだとか思ってることなんて、馬鹿みたいなことなのかもしれない。だって、世の中にはアカネのファンだって言う子がきつとたくさんいるんだ。それなのに俺は…。

「園ちゃん、どしたの急に？もしかしてファンなのー？」

「あ、違う違う！ただ聞いたただけだから！」

俺は何だかむなしくなった。

俺は、勝てっこないよ。

いっぱい可愛い女の子達がアカネのことを好きなんだって思ったら、俺なんて絶対に勝てっこない。いや、元々勝敗の問題じゃない

んだけど、俺がアカネの傍にいてドキドキなんかしてるのは馬鹿らしいことなんだって分かった気がする。思い知らされたっていうか……。

むなしくて仕方なくて、俺はレジミスを連発で引き起こした。

店長にがつつり怒られてしぼんでたらユリちゃんが話しかけてきてくれたけど、俺はやっぱり立ち直れない。いつそ落ち込んでる内容を暴露しちゃいたかったけど、それはやっぱり出来なくて、俺はもぬけの殻みたいになりながら仕事をした。

「園部さん、これプレゼントです。使って下さいねー」

退勤前に、気を使ってくれたのか、ユリちゃんが俺に小さな小瓶を渡してきた。この瓶ってどこかで見たことあるなと思ったら、ウチの香水売り場に売ってるアトマイザーだった。小分けするやつ。

アトマイザーの中に、少しの液体が入ってる。

ユリちゃんいわく、元気が出る香水です、らしい。

仕事が終わったあとにシュツと吹き付けてみたけど、ふんわり甘い感じの匂いがして、俺には似合わないと思った。バニラみたいな匂いだ。でもユリちゃんがくれたものだし、大事にしないとなってしまう。

その匂いには、アカネも気づいたらしい。

「お、甘い匂いがする。美味そう。女の子っぽい匂いだな」

くんと鼻を鳴らしてバニラみたいな匂いを嗅いでるアカネを見て、俺はちよつと笑いそうになった。でも、それと同時に何だかものすごく辛い気持ちになった。

俺には似合わないバニラの匂い。

アカネはきつと、好きなんだろうな。

## 04：ライブ

ライブハウスというところに初めて行っただけど、そこはどうやら数あるライブハウスの中でも大きめのところらしかった。結構人がたくさんいるけど、やっぱり女の子が大半を占めてる。

可愛い人形みたいな服を着てる女の子。

胸の肌蹴た派手な服を着てる女の子。

いろんな子がいて、それぞれグループになってわいわいと楽しんでいる。

そんな中で俺は一人きり、普通のシャツにズボンなんていう味気ない格好をしていた。ファンの子達はあんなに可愛い子ばかりなんだ。そう思うと、アカネの目に映るのはそんな可愛い女の子達なんだろうなって気がして、俺は何だか辛い気持ちになってくる。

ライブハウスはワンドリンク制っていうのになってて、必ずドリンクが1つつくようになっていた。500円。結構するもんなんだな、なんて思いながら俺はジンジャーエールを頼む。

確かアカネはしもてだって言ってたっけ。

そう思って左側の後ろの方に、俺は立っていた。やることがないからジンジャーエールをちょびちょび飲んで、周りをぼんやりと見てみる。会場は満員とまではいかなかったけど、8割がたは人が入っていた。

チケットには、DOOR ¥3500と書かれている。

へえ…当日だったら3500円するんだな…。何だかこんなチケットを貰ってしまったてよかったんだろうか、なんて気分になってきてしまった。というか、アカネのバンドのチケットはこれだけするんだ。やっぱり人気の証拠だろう。

会場内はガヤガヤと騒がしかったけど、暫くして、突然ふつと電気が消えた。その瞬間、わああああと声が一斉に響く。

悠長にジンジャーエールを飲んでいた俺は、突然後ろからタツケルされて、危うくジンジャーエールをこぼしそうになった。危ない危ない。

ふう、なんて思いながら正面を見る。

と、ステージの上にアカネの姿があった。

「あ…！」

俺は思わず短い声を上げて、一歩進み出る。あれが、バンドでのアカネなんだ。アカネが持っているのはギターだった。そうか、アカネってギタリストなんだ。俺は今更そんなことを思う。

うわー…やっぱりアカネ、カッコイイよ…。

光が当たってキラキラしてる金髪が、アカネが動くたびにふわっと揺れる。俺が惚れたあの日みたいに、アカネは黒いシャツに黒いズボンを履いてた。

「アカネええええー！！！！！！！！！！」

ふいに、隣の女の子が手を振り上げてそう叫んだ。俺はドキツとしてしまう。アカネのファンなのかな？いや、それしかないよな。

この会場の中に、アカネのこと好きな女の子ってどのくらいいるんだろう。きつとたくさんいるんだろうな…。やっぱり、俺なんか適わないよ。だってその子たちはアカネの姿を今までいっぱい見ている、こんなふうにアカネに好きだって叫び続けてるんだ。俺にはそれすらできない。

周囲は曲に合わせて手を振り上げていて、みんなノリノリだった。

俺がどうして良いか分からなくて、ただただステージ上のアカネを見る。そして、なんとなく、胸の前で小さく手を振ってみた。どう考えても初心者のことをしてる俺がちょっと空しい…。

…が。

「え…？」

そのとき、ステージ上のアカネが、ピックを指に挟んだまま挨拶するように右手をすっと上げた。

え？…ええっ！？

まさか…俺？

いやいや、そんなことないよな。だって見えるはずないし。

そもそも俺に対してじゃないよな。

そうだそうだ、自意識過剰だぞ、俺！期待しすぎだっつーの！

俺はそう思いながらも周りをキョロキョロと見回してみたけど、周りのみんなは誰も曲に夢中で、一心不乱に手を上げているだけだった。

お、おかしいな…。

そう思ってまたアカネの方を向くと、アカネがにっこりと笑った。

俺の大好きなあの笑顔で。

ライブの日、アカネは家に帰ってこなかった。

きつと飲んでるんだろ。なんとなくそんな気がする。

俺がアカネに会ったのは、その次の日の夜のことだった。

「おつす。ライブ来てくれたんだな、ありがとな！そっぴやジュン、手振ってくれたよな」

「えっ！あれって見えてたの？」

「見えるよ。人が多いから見えないって思うだろ？でも意外と見えるんだよ、ステージの上って。で、あの辺りで飛びぬけて背の高いやつがいるな！って思って。ジュンだってすぐに気づいた」

「そ、そうなんだ…」

ひえー… そうなんだ、意外と見えるもんなんだ。

っていうことは… やっぱりあれば、俺に挨拶してくれたってことなのかな。俺はちょっとドキドキしてしまった。だってあれだけの人の中で、アカネのファンだってたくさんいるはずなのに、その中で俺に挨拶してくれるって… なんかすごく嬉しい気がする。

アカネはビールをプシュツとあけると、それをゴクゴクやりはじめた。

「で、俺ってどうだった？ かつこよかっただろ？ なーんちゃって」

「うん、かつこよかったよ」

「そっぴだよな… って、えー？ マジにそっぴってんの？」

驚いてビールを噴出しそうになってたアカネに向かって、俺はうんと頷いた。

だって…本当にかっこよかったし…。  
素直な気持ちなんだけど…。

「うわー本当にそういわれるとは思ってもみなかった。でもなんか嬉しいな。ありがとな、ジューン」

「そんな。別に、本当にそう思ったただけだし」

「あはは、そっかそっか。いやーなんか素でそう言われると照れるな」

アカネはきつと、男として俺がアカネをカッコいいって言ってると思ってるんだろう。確かにアカネは普通に見てもカッコいいと思う。だけど実際俺は女だし、アカネのこと好きだと思ってるんだ。

もしかしたら俺は、アカネのことが好きだからカッコイイと思うのかもしれない。

だけど、そんなこと言えないよ。

あの会場にいた女の子達みたいに、手を振り上げて、アカネ、って、そんなふうに叫べないよ。

「良かったらまた見に来いよ。チケットはやるからさ」

「あ、チケット！そうだ、あれ3500円もすんじゃん。俺、払うよ！」

「いらんいらん！俺が見に来て欲しいって思ったただだから、そんなの絶対受け取れないって」

「でも…」

「いいからいいから」

なあ、アカネ。

アカネがそう言ってくれるの嬉しいし、俺だってまたアカネのライブを見たいけど、あの空間で俺は、ただでさえ無い自信がどんどん無くなってく気がするよ。

チケットを買って、わくわくしながら当日を待つて、やっと会えたんだって喜ぶ女の子達に比べて、俺には何もないんだ。

俺にあるのは、ただアカネが好きだったこと。

だけど俺は、あの3500円のチケットにその気持ちを全部つめ込められるのかな。あのファンの可愛い女の子達みたいに…。

アカネが、バンドのことについて何かを話している。

だけど俺の耳には、それが全く入っていなかった。



## 05：赤禰という男

「お名前は園部純さんで宜しいですか」

「はい」

「失礼ですが…性別は？」

「あ、女です」

「女性でいらっしやいますね、大変失礼致しました、ありがとうございます」

俺の人生では、こういうやりとりが少なくない。純という名前も男寄りだし、外見も男そのもの。大概第一印象では男として扱われる。女です、と言うと一瞬ビックリするんだ。最近ではその動作にも慣れちゃったけど。

電車に乗っているとき、隣に女の人がいると、たまに不審そうな顔で見られることがある。俺は女だから、隣が女の人の場合、それほど気にせずに近づいてしまうんだけど、相手からしたら俺は男に見えるわけで、なんだこの男、近寄るなよ、というオーラが出ているわけだ。まあこれにもなれたけど。

休日に、久々に買い物へと出かけた。

服なんてまるで興味が無いけど、文房具を買いに行く道の間にセレクトショップみたいのがあって、何の気なしに立ち止まってみたり

する。

花柄のワンピース。ふりふりだ。

そういえば、アカネのバンドのファンの女の子がこんなのを着てたな。

「彼女へのプレゼントですか？」

寄ってきた店員を笑顔で交わして、俺はそそくさとその場から逃げる。

違う。

プレゼントなんかじゃない。

もし…もしもだよ？

俺があんなの着たらどうなっちゃうんだろうって…なんかそんなことを考えたんだ。気持ち悪くて笑っちゃうけどさ。

アカネはああいうワンピース着る子、好きかな？

小柄で、声も高くて、胸もふんわりあって、可愛らしく笑うような子。アカネに似合いそうだな。

「はは…馬鹿らし…」

俺には縁がないさ。

それは、ある日の夜のことだった。

いつものようにアカネの帰りが遅くて、俺は寝る準備なんかをして、もうそろそろ一時になろうかって時間のこと。アカネがようやく帰ってきて、俺は「お帰り」と言った。だけどおかしなことに、玄関先からはアカネ以外の声も聞こえてきたんだ。

あれ？

俺はTシャツにハーフパンツっていう味気ないいつもどおりの格好で玄関先に出向く。そして、衝撃映像を発見した。

「あ、ジュン。悪い、今日だけコイツ泊めてくれよ。俺の部屋から出さないし迷惑かけないからさ。ホント悪い」

アカネの横にいたのは…可愛い女の子。

彼女は結構酔ってるみたいで、両手でアカネの胸に抱きついてる状態だった。それを見た瞬間、俺の心はざわざわと揺れた。

アカネの部屋？

部屋から出さないって？

それ…どういうこと？

俺は呆然としながら、彼女を引きずって部屋に入り込むアカネを見送る。心臓がドキドキしてどうしようもない。これはいつものドキドキとは違う、もっと嫌な、すごく嫌なドキドキだ。

アカネの部屋のドアがパタンと閉まると、中から女の子の甘ったるい声と、それをけん制するようなアカネの低い声が響いてきた。

いつもだったら、部屋にこもる前にビールを飲んでリビングで一緒にダベるのに、今日はそれすらない。俺は、一人きりだった。同じ家の中でアカネと見ず知らずの女の子が一緒にいて、俺はただそれを見過ごすしかなくて…。

「やば…どうしょ…」

やば…。

馬鹿だなあ、俺。  
すごい馬鹿だ。

なんたる、何だか今すごく泣きそうなんだ。

なんか視界が潤んでて良く見えないや。部屋の中のもの全部、二重

に見えるよ。視界はこんなにかすんでるのに、どうして耳だけはちゃんと聞こえるんだろう、不公平だよな。目がかすんだら、耳もかすむように作ってくれれば良かったのに。

『お前な…ほら、いい子にしてろよ?』

『はあ…い』

『よしよし、やればできるじゃん?』

『そ…なの…。ね…ね…アカネご褒美はあ?』

『全く仕方ないヤツだなーほんと…』

俺は…。

俺は、この夜まで知らなかった。

今まで何度も、自分じゃ駄目だとか叶わないとか勝てないとかいろいろ思ってきたけど、これほど大きなショックがこの世にあるんだなんて知らなかったんだ。男と間違えられることなんてたいしたことない。痴漢疑惑とかからかわれて馬鹿にされることだって、ブスとか男女とかひどいこと言われることだって本当にたいしたことないんだ。だってそんなのどうだって良いことだから。

でも、アカネは違う。

俺はアカネと同居してる「男」ってだけで何も無い。

だけど、こんなふうにアカネが女の子といちゃついてるシーンは辛くて辛くてどうしようもなかった。何だかもう、出て行きたくなかった。この場から逃げたい。これってなんなんだろう？

リアルに、アカネが誰かを選ぶところなんて、やっぱり見たくないよ。

アカネ、その女の子を選ぶのか？

可愛い女の子。

可愛い…アカネに良く似合ってる、女の子。

「も、だめだあ…」

もうやだ。

もうやだ。

こんな気持ちって無いよ。

このままアカネの隣の部屋で、アカネと女の子のやらしい声とか聞くハメになるんだって思ったら、俺はもう此処にはいられないって思った。

やだ。

やだ。

やだ。

俺の頭はその言葉をリピートする。リピートすぎてバカの一つ覚えみたいになった。どうしようもない。麻痺してる。

だけど、そんな俺の脳に呼びかけるように、ふと響いてきた声があった。

「おい、ジュン」

「アカネ…？」

ふと見ると、ドアを静かに閉めて忍足でこっちにやってくるアカネの姿があった。俺はそんなアカネを呆然と見てる。アカネは服もちゃんと着てるし、特にあやしいカンジじゃない。

「いや、ほんと悪かったな…って、オイ！ちょっと待て、お前何泣いてんだよ！？何かあったのか？」

「ばっ…アカネが悪いんだろ！」

弁解しなきゃいけないところなのに、俺は何だかもういっぱいばいで、わけも分からないままそんな言葉を口にした。最悪だ。

アカネは「え！？」って驚いてる。そりや当然だよな。だって、アカネが女連れ込んだってだけで泣くなんてありえない話だし…。

「ちょ…おいジュン、泣くなって。ゴメンって、な？そりや女連れ込んだ俺が悪かったよ。そりや誰だって人のやってる声なんて聞き

たくないもんな。だけど違うんだ。そういうつもりとかなないから。ホントに。怒るならまだしも泣くとかって…ちよつとマジにさ…そんなにシヨックなもんかな、こういうのって…」

アカネは明らかに混乱してた。

俺は、そういうつもりはないんだっていうアカネの言葉にすごくホツとして、ものすごくホツとして、ホツとしたらまた涙腺が弱ってしまつて本当に困ってしまったもんだ。泣くのなんて嫌だったし、アカネに見られるなんてもっと嫌だったけど、なんだかとまらなかつたんだ。

恥ずかしい…。

最悪だよ…。

「あのな、あの子、バンドマンキラーなんだよ。ライブの後って打ち上げてことで飲みとかやるんだけどさ、必ず出沒して泥酔してバンドマンの家まで付いてくるんだ。そういうの繰り返しやってりまくってるらしくて、とうとう俺にも白羽の矢が立つたってわけ。いやーモテない俺もとうとうこの日が来たかってなー」

「そうだったんだ…」

そうとは知らず、俺はアカネを疑ってしまった…悪いことしたんだな、俺…。けどあのシチュエーションじゃ仕方ないって思う。仕方ないけど、俺はアカネのこと、本当に責める資格なんてどこにも

ないんだ…。なのにアカネは謝ってくれる。

何だか俺、すごい我儘だよ…。

何様なんだよ、俺…。

何だか自分がものすごく嫌だ。むかつくよ。

「ぶつちやけた話さ、ウチのメンバーもあの子とやっちゃっててさ、ほんと馬鹿だよアイツラ。狭い業界に穴兄弟だらけてマジ洒落にならないよな」

「アカネはどうしてやらないんだよ」

「え？俺？そりゃだって、別に好きな女じゃないからさ。誘われたってやらねーよ。やりたくないし」

うわ…。

アカネって何か…。

意外だ。いや、意外じゃないのかな？

アカネは、他の男とはちよつと違うみたいだ。誘惑に負けないなんて、なんか良く分からないけどスゴイって思う。裏を返せば、好きな女の子とだったらやるってことなんだろうな。でもそれは当たり前だよな。

そっか…アカネってきつと、一途ってことなんだ。

「にしてもなーまさかジユンが泣くとは思わなかったな」

「その…こ、ごめん…」

「別に良いんだけどさ。あつ、分かった！そうかそうか、お前ってばヤキモチやいたんだろー？」

「ばつ馬鹿かよ！そんなわけないだろ気色悪いな！」

…まったくその通りです。はい。

とは言えるはずも無く…。

「あはは！そっかー何だーヤキモチかー」

「だから！違うって言ってんじゃん！耳かっばじって聞けよ！」

「よしよし、いい子だなー。俺そんな節操なしじゃないから安心して良いぞー。あはは」

「こん…のやろー…」

アカネは俺の頭をポンポン叩きながらまるで子ども扱いだ。それはそれでム力つくんだけど、アカネに触られてるってことが何だか嬉しかったりするあたりが複雑だ。何だよもう…わけわかんないよ…。

嬉しかったり、むかついたり、苦しかったり…。

人を好きだってことは、こんなに大変なことなんだ。

「はは、なんかおもしれーな」

アカネは、首をひよいともたげて、俺の顔を覗き込んでくる。それは俺の好きなアカネの仕草で、俺は思わずドキッとしてしまった。

近い、近すぎる！

顔が近いんだよ！！

「なんかジュンって女の子みたいだな。なんか可愛い」

「は…」

ちょ…。

この至近距離でその言葉はヤバイだろ…。

マジに…。

っていうか女の子みたい、じゃなくて女だから。



「俺マジだよ。どうする？」

「え、えっ、ちょ、ちょっと！ええっ…！」

「ジュン…」

何なんだよこの展開！ちょ、ちょっと！俺やばい！ついていていい！

嘘だろ！？マジなのか！？

ええええー！！！！

アカネの顔が、ものすごく近くにある。  
大好きな顔が、じっと俺を見てる。

アカネの低い声がちよつとかすれ気味に耳に響いて、異様にドキドキした。めちゃくちゃドキドキしてるのが、もしかしてバレてんじゃないかって不安になって仕方ない。

アカネは俺の肩に腕を回してて、これってアカネの体温なんだって思ったらもうどうしようもない気分だった。

キスなんかしたら…失神しそうだよ…。  
救急車で運ばれるんだ、きつと俺…。

駆けつけた親が「何が原因ですか」って聞いたら、医者が「どうやらキスされて倒れたようです」って…あー笑えない…馬鹿丸出しだ…。

真面目なアカネの顔、すごいカッコイイ。というか、こんなふうに見られて落ちない女の子なんていんのかよ？絶対落ちるよ。落ちないほうがどうかしてるよ。

アカネ…俺どっしょよ。

すごい好きだ…。

「……なーんちゃってな！」

「……は？」

「嘘だよ、嘘！さすがにジューンには手出せないって。もしかしてドキドキした？」

「ばっ……バカかお前はあああああああ……！！！！！！！！」

ドゴツ！

俺はグーで思いつきり殴ってやった。

グーだ、グー！パー！なんか甘いぜ！この野郎！！

「うおおーマジかー！これは効いたぜ…青タンくるなこれは…！」

「アカネなんて女と寝てる!!!」

「おつ、言ってくれるな。本当にそれで良いのかよ？」

「……」

やばい…墓穴掘った…。

俺が言葉に詰まってる、アカネはいつものあの笑顔になって、ふいに俺の肩をポンと叩いた。

「バーカ、何でもかんでも本気にすんなよ。そんなことするわけないだろ。だってお前さっき泣いてたし。しねーよ、そんなこと」

アカネは俺から手を離すと、あー疲れたーなんて良いながら適当に床に腰を下ろした。それが何だか妙に普通どおりで、俺はどうして良いか分からなくなってしまう。

暫く呆然としてると、アカネが「今日俺こっちで寝るから」と言い出した。

俺の心臓はまたしてもピンチだ。

といって、アカネの部屋には返したくない。

「床しか貸さないからな」

「えーベット入れてくれないのかよ？」

「誰が入れるか！」

そんなドキドキすることできるわけないだろうが……！

アカネはちよつと笑った。それから、嘘だよ、と言った。

何なんだよもう……今日は嘘が多すぎるよ。何でもかんでも嘘嘘って……俺のことからかいやがって。

だけど俺は、まんざらでもなかった。

だってアカネは、自分の部屋には戻らず俺の部屋にいてくれたんだ。本当だったらリビングっていう選択肢だってあったのに、それでも俺の部屋にいたんだ。

俺はアカネのことが好きで、バカだから、変な期待をしてしまいそうだ。そんなこと絶対にあるわけないのに。バカだな、俺。

だけど俺は、アカネがどういうやつなのか、少し分かった気がした。

## 06：女という生き物

なんで親は、俺を男に生んでくれなかったんだろう。俺はいつもそう思ってた。特別男になりたいとか思ってるわけでもないんだけど、男っぽく見られるし、女っぽいことが苦手だったり興味がなかったりするから、結果的に「男だったら楽だったのに」という思考にたどり着くわけだ。

だけど、俺はやっぱり性別上女でしかない。外見とのギャップがありすぎるのが一番の問題なんだろうけど。

だけど、その外見を気にしない人間の中には存在してるんだ。

「折り入って話して、そんないきなり改まってなんですか？もしかしてクビとか言いませんよね？」

「まさか！そんな話じゃないって」

俺は、目の前で女の子らしい可愛い服を見事に着こなしているユリちゃんを見ながら、明らかに怪しい動作を繰り返していた。

職場近くのコーヒショップは、実のところちょっとした溜まり場になってる。俺はあんまり使わないけど、お茶をして帰ったりとかミーティングに使ったりとか、用途はいろいろらしい。

休みの日、俺はユリちゃんにお願いがあると言って時間を作ってもらった。ユリちゃんは丁度退勤したところで、すっかりくつろいで

いる。

ユリちゃんを呼び出したのは、相談をしたかったからだ。  
勿論仕事の話じゃない。俺の…つまり、恋愛ごとの相談だ。

此処最近、もう自分だけではいっぱいになってしまつてどうしようもなくなつていた俺は、とにかく誰かに助けてもらいたかった。というより、話を聞いて欲しかったのかもしれない。だけど、話を聞いてもらうには、それなりの勇気が必要なんだ。

俺みたいなやつに好きな男がいるとか、そんなの世間から見たらネタくらいにしかないだろう。だけどネタだけで終わつてしまつては相談できない。だから、俺はユリちゃんを選んだんだ。

ユリちゃんは、職場の中でも口が堅いことで有名だし、優しいということでも有名だったりする。

だから俺は、勇気を振り絞つて相談することにしたんだ。

「あのさ、笑わないで聞いて欲しいんだ。もう本当にどうしたら良いか分からなくて…」

「恋の相談ですか？」

「えっ!？」

何で分かつたんだ!？

驚く俺の前でユリちゃんが小さく笑つてる。

「勘ですけど、園部さん、好きな人いるんだろうなって思ってたんです。何となく雰囲気ですご思ったんですよ」

「そ、そうなんだ…すごいな、その勘…」

それが女の勘とかいうやつなら、俺には絶対無い気がする。さすがはユリちゃんだ。

俺はユリちゃんに感心しながら、俺の抱えている大問題についてを切り出した。

恋の相談なんて、俺の人生の中で初めてのことだ。

いくら相手がユリちゃんとはいっても、さすがに勇気が要った。

だけど…。

「園部さん、その人のことかなり好きなんですネ」

「なっ！そ、そんなことないって！」

「そんな隠さなくっても良いのに。見てれば分かりますよー、好きなんだなあってことくらい」

「そっ…」

そんなものなのか！？

俺はものすごい勇気を使いながらアカネのことを話したんだけど、ユリちゃんはその間どういう気持ちで聞いていたんだろう。園部さんったら、なーんて思いながら聞かれてたらものすごく恥ずかしいんですけど…。

だけど、ユリちゃんはやっぱりユリちゃんだった。俺が信頼してるユリちゃんそのものだった。

「園部さん、私、隠さずに言った方がいいと思います。気持ちを伝えるのは難しいと思いますが、とにかく女性だつてことだけは言った方が良いでしょう。多分、園部さんの悩みって全部そこにかかってると思うから」

「で、でも…」

そんなことを言ったら…アカネは傍にいてくれないと思う。出て行くんだと思う。そう思ったら、怖くて出来ないんだ。きつとこれですごくズルイ考えなんだろうけど。

ユリちゃんは、俺のそんなズルイ考えすら見抜いていた。すごい。すごすぎる。

「もし女性だと知って離れていたら、節度のある人って証拠ですよ。離れたら寂しいのは分かります。でも、そこから始めないと園部さんの気持ちを形にはできないんじゃないかなあ」

「形って？」

「付き合っつてことですよ」

「っ、付き合う！？」

「そうです。だって園部さん、その人と付き合いたいって思ってたですよ？もし傍にいただけで良いっていうなら、このまま女性だっ  
てことを知れないままでも良いってことになるじゃないですか。  
園部さんは、次のステップに行きたいって思ってるんですよ。その  
人との関係」

想像するだけでも恐ろしい…。

アカネと俺が…どうにかなるとかそういう…あゝ駄目だ！恥ずかし  
くて死にそうになる。想像ですらヤバイ。

でも…確かにユリちゃんの指摘通りなんだと思う。

傍にすることが第一優先だったら、このままいればそれで良いんだ  
と思う。だけど、好きでどうしようもなくて、どうにもできなくて  
…それってつまり、どうにかしたいってことなんだ。

その「どうにか」っていうのはつまり…そ、そういうことなのか…。

「でも、きっとその人、園部さんのこと好きだと思うなあ」

「な、何を根拠に！？」

「だってー、その人は園部さんのこと男だと勘違いしてるわけでしょう？それなのに園部さんに思わせぶりなこと言うなんて、性別がどうのって以前に園部さんのこと好きなんですよ。そうじゃなきゃゲイかな？」

なーんてね、とユリちゃんは笑う。

なーんてね、という言い方がアカネを思い出させて、俺はちょっとドキツとしてしまった。

結論として、ユリちゃんは、女であることを白状しろと言う。確かにそれは言った方がいいのかもしれない。だんだんそんな気分になってきた。もしそれでアカネが俺を拒否したら…悲しいけど、つまり俺は次のステップに行く資格なんて無かったってことになるんだから。そうなったならそうなったで仕方ないのかもしれない。それを怖がってこのまま避けていたら、結局悶々とするしかないんだ。

でも、俺にはやっぱり勇気が必要だった。

白状するにも、白状するシチュエーションというのが必要だ。

どのタイミングで？

そもそもどこで？

それを考えただけで俺は頭が沸騰しそうになってしまう。

「せっかくだし、デートすれば良いじゃないですか！そしたらいっぱいその人といられますよー。外出に誘うくらい問題ないですよね？」

「デ、デート…！！！！」

「映画とかドライブとか…ベタだけど遊園地かなあ」

「ゆ…」

ユリちゃん…それってバリバリのデートスポットばかりなんですけど…。そんなあからさまにデートっぽい場所にアカネと二人きりでなんて想像できない…。

アカネは多分車を持ってないから、ドライブっていうのはないだろう。そういえば免許を持ってるのかどうかも知らない。

残るは…映画か遊園地？

…駄目だ、恐ろしすぎる。

俺があんまりに弱音を吐くもんだから、ユリちゃんは仕方なさそうに笑って、じゃあ食事にしたらどうですか、と割と何とかできそうなプランを立ててくれた。

ユリちゃんのプランはこうだ。

俺がアカネを誘う。そして二人でショッピングモールへ。その辺の店をプラプラ見ながら最後に食事。…で、最後に白状するってわけだ。

まあ簡単といえば簡単だろう。…多分。

「じゃ、頑張ってくださいね！」

ユリちゃんはにつこりと笑って俺にエールを送ってくれる。  
この笑顔にごめんなさいなんて謝ることがないように俺は頑張らなくちゃいけないわけだけど、やっぱり想像するだけで緊張してしまう情けない俺がいたのだった。

アカネを誘うとき、俺はあからさまに態度がおかしかった。  
でもアカネは、何でもないように普通にOKをしてくれた。

「そっいえば一緒に出かけたことって無かったよな。じゃあ初体験だな。あーそうだ。俺らっていつも家で一緒にメシ食うとかないじゃん。ジュンってどんなメシ食ってたの？」

「えっと…コンビニ弁当とかかな。外で食べてくるときはいろいろ食べるけど。ファミレスとかファーストフードだし」

「ふーん。じゃあファミレスでいつか？」

ファミレス!!!

…いや、いいんだけど。

むしろそのほうが緊張しなくてすむんだけどさ。

でもユリちゃんと話してたとき想像したのが妙に敷居高そうなところだったから、何だかちょっと拍子抜けしたっていうか…でもまあ、そうだな。それが丁度良いかも。

アカネの仕事の都合で、裏別称デートは一週間後になった。

一週間…。

俺はその間に、覚悟を決めなきゃいけないわけだ。  
アカネに本当のことを言っ…。

…。

…。

あれ？

良く考えたら、アカネに白状するのが目的であって、好きですって告白するのが目的なわけじゃないんだよな。そう考えたらちよつとだけホツとした。

ここでホツとできる分、俺はちよつと成長した気がする。きっとユリちゃんに告白したからだろう。さすがはユリちゃんだ。

とにかく一週間、それが俺の腹を決める期間だった。

## 07:デート

俺の今までの人生の中で、これほどにまで早い一週間があっただろうか。そう思うくらい、その一週間は早々と過ぎていってしまった。

約束の日、俺は仕事を早引きさせてもらって、待ち合わせの1時間以上前からそわそわしながらアカネを待ってた。

待ち合わせは、駅の改札前。

アカネの職場は電車で一時間以上するところにあるらしくて、仕事帰りにそのまま行こうってことになってるんだ。アカネにとっては本当に仕事でぐったりした状態、ってことになるんだろうな。といつても、アカネはいつもそんな素振り見せないけど。

退勤前、ユリちゃんが「頑張ってくださいね」とエールを送ってくれた。すごく嬉しかった。

俺はちょっと考えて、以前ユリちゃんに貰ったバニラの匂いのする香水をつけてる。おいおい、何意識してんだよって自分でも思う。そもそも似合わないし、なんか異常に気合入ってるって感じた。

でも、気合入れないと切り抜けられないくらい、やっぱり緊張はしてるんだ。

そんな俺の元に、さっそくハプニングが襲い掛かった。

『な、ジュンちょっと出て来れないか？仲間内で評判良い店あってさ。ここどうかなーって思ってた。結構美味いらしいからさ』

アカネからの電話で、ファミレスのはずが急遽別口の場所に変更になる。聞いたらそんなに遠くないところだったからとりあえずOKしたけど…一体どんなところなんだろう。

電車に乗って10分。割と近い。

その駅は連絡にも使われるほどデカくて、人の利用も多い。

ちゃんとアカネを見つけられるかどうか、そんな基本的な部分に心配を覚えてしまう俺…。

けど、意外とすぐにアカネとは合流できた。

「ごめんな、いきなり呼び出して。メシ食いにいくって言うたら、じゃああそこ行けよってすごい勧められてさ。俺も行ったことないし折角だからなって思って」

「そうだったんだ。じゃあ楽しみだな、そこ」

「なー。でもな、そこ居酒屋なんだってさ」

居酒屋！？

俺は思わず心臓が飛び出そうになった。

といってもまあ、いつもアカネはビール飲んでるもんな。ある意味では一緒だよな、同じ酒だし。

「じゃ、早速向かいますか！」

アカネのナビで向かったのは、駅を出て少し歩いたところにあるバカデカイビルだった。よくある、居酒屋ビルみたいなやつだ。そのビルの中の6Fにあるのが、目的の店らしい。

『和のいたわりー享楽囲ー』と書いてある。

その『和のいたわりー享楽囲ー』は、その名の通り和風の店だった。つくりも和風だし、どうやらメニューも魚介系が多いっぽい。それでも値段はそんなに高くない。

「2名様ご来店ですー!!!」

「いらっしやいませ、お客様ー!!!」

良く聞く威勢のいい歓迎を受けながら、俺はアカネの後ろをついてく。

が、通された席を見て思わず顎が外れそうになった。

な、ななな何だこれは!!!?

「なるほどなー。だからアイツラあんなに勧めてきたのか」

「それどういう意味だよ、アカネ……」

「いや、女と行くんだろって冷やかされたから、冗談でそうですよーって言ったりしてたんだよ。で、その内店の話になって。そしたら此処が美味いっていう話でさ。つまりアイツらが女と行って良さがだった店ってことだったんだな」

「それアカネが悪くないか!？」

「あはは、そうかもー」

こらこらこらこらー！！！！！！！！！！

俺は心臓バクバクさせながら心の中で絶叫した。

だって…。

和風だからかもしれないけど簾みたいなのが垂れ下がってる完全個室で、しかもそれがめちゃくちゃ狭い！横同士に座りあうタイプの席になってて、まあ3人までなら座れるかなって程度。因みに向い側には椅子はない。しかも妙な小道具である。時代劇で見かける、あの枕だ。一体何のために枕があるんだか知りたいような知らないような…！

俺はアカネに勧められて、奥の方に座った。

そのとなりに、アカネが座る。

近くにいるせいか妙に熱気がくるような気がして、俺は品書きを開きながらも何も見えてなかった。あんまり飲めないくせに「ビールで」って言うのがやっとなったんだ。あー情けない俺…。

「それではお客様、今宵はごゆるりとお楽しみ下さいませ」

店員さんは、席を離れるときに必ずこの台詞を言う。

っていうか！

その台詞なんかヤダ！なんかいやらしいって！

って、俺の考えすぎかな…というか意識しすぎか…。

「いやーなんか久々だな、こういう店とか来るの。最近即効家だったからな」

「そうなんだ？職場の人と飲みに言ったりしないわけ？」

「いや、結構盛んらしいんだけど俺は帰ってるってだけ。だって家でもビール飲めるだろ？」

まあ確かに。

でも…っていうことはつまり、思わぬところで俺は、アカネと一緒にいる時間が多くなってたってことか。そのアカネの考え方に感謝しなくちゃだな。

「それで？何かあったのか？」

「は？」

「だって、いきなりメシ食いにいこうなんてさ、やっぱ何かあんだろ？ものすごいカミングアウトがあるとか？」

「なっ、なんでそういう方向に行くんだよ！」

…おみそれしました。

そうだよ、そうですよ。そうそう、その通りですよ。

「だけどいざそう言われると何だか「はい、そうです」と言えなくなってしまう。だってこれって見抜かれてるってことじゃなか。」

でも、だからってこのまま進展しないっていうのも駄目だよな、きつと。だってユリちゃんがせっかくエール送ってくれたんだ。こんなんじゃない駄目だ。

俺はそう思って、決意したようにアカネを見た。アカネは何も考えてないみたいにもどおりのカンジで俺を見てる。

「あ…あのさっ。つまり、その……」

「ん？」

アカネが、俺の好きなあの仕草をしてくる。俺の顔をしたから覗き込んで、どうしたんだ？っていうような、あの仕草だ。

あーもうっ！何でこんなタイミングでそれやるんだよっ。  
心臓が死ぬだろーが！！

「お待たせいたしました」

そのとき、上手いタイミングで店員さんが飲み物と食事を運んできた。やってきたビールに歓喜したアカネが、早速乾杯しようと言う。だから俺は一度決意したはずのものをグツと飲み込んで、とりあえずは乾杯した。

でも…。

「そういえばさ、俺のバンドのことなんだけどさ。今度から結構忙しくなる予定なんだよ。前にも言ったよな？で、仕事がな…」

ちょっとしたスキに、アカネがそんな話題を振ってきて、俺はとにかく聞く側にまわってた。内心いつその話題が切れるのか気が気じやなかったんだけど、飲みながら聞いてるうちにだんだんと俺の脳みそはとろんとしてきてしまったんだ。

やばい…。

酔ってきた…。

あんまり飲めない上に、アカネといて緊張なんかしてて、若干ヤケ  
気味でいつもよりペースが速いから、上手い具合にぐるぐる回って  
くる。やばい、あきらかにヤバイ。

「だけどさー、それもどうかなってカンジでさー」

「…うん…」

俺の目は確実に半目だった。多分、死んでた。

それなのに俺はビールを追加なんかして、それをまたガブガブ飲んで、何だかもう自分でも止められない状況になってた。

終わった…終わったよ、俺…。

途中、アカネが「大丈夫か？」って声をかけてきたけど、グデング  
デンで良く分からなかった。うんとかすんとか言ったかもしれない  
し、ぼーっとしてたかもしれない。

「うー…」

「おい、ジュン！ちょっと大丈夫かよマジで！」

一つだけ覚えてるのは、アカネの胸がものすごく至近距離にあった  
ってことだけ。多分、心配したアカネが俺の肩を抱いたか何かした  
んだろう。

うわー…、って思った。

思ったけど、何だかもう頭がグルグルしてて、酔った勢いっていうのか、俺はアカネの胸に倒れこんでた。

楽だ。なんか楽。

それに…なんかあったかいよ…。

「ジュン！おいこら、寝るなって。おい」

あー…。

もー駄目…。

…おやすみなさい…。

## 08：距離とジレンマ

最悪だった。

多分その日は、俺が知る中で一番最悪な日だった。

起きると既に昼過ぎで、頭がガンガンして、胃もムカムカするわ体はダルいわで俺は最悪のコンディションだった。何だかぼーっとする。それに加えてどうだ、この時間は。完璧遅刻じゃんか！

慌てて起き上がろうとするけど体がダルすぎてどうにもできなくて俺は取り合えずなんとかキッチンまでよろよろと歩いた。せめて水を飲もうと思ったからだ。

と、キッチンテーブルの上に置手紙があった。アカネからだ。

「連絡しといたから寝てろ！」：「？」

…って、おい。

これはつまり……ちよい待て待て待て！

まさかアカネが俺の職場に電話したってことかよ！？園部は二日酔いだから休みます、って？ええええええ！？マジにかー！？

俺はあんまり気が動転したんで、水を飲もうとしてたのに何故か真新しいフライパンを手にしていた。違ーう！これじゃないっ！

「待て…落ち着け、落ち着けよ俺…！」

この場合問題なのは何かっていうと、俺が当日欠席したのもさる事ながら、アカネが電話をしたってことだろう。何故本人が電話してこないのかって絶対思われてる。あの電話の男は何者なんだ、と。いや、待て。それだけじゃないぞ。問題は…そうだ、問題は！

「何で起こしてくれなかったんだよ、アカネのあほ…！」

これだろ…！！

俺の空しい雄たけびは、一人きりの空間に響き渡って寂しく消え行くはずだった。その予定だった。だけど、その予定は意外や意外に裏切られ、暢気な…といったら悪いけど、俺の起こしてくれなかった恨めしいアカネの声が響いてくる。

「おいおい、何起きてんのお前。ほら早く寝た寝た！」

「ちょ！アカネ！何で起こしてくれなかったんだよっ」

「だってお前めちゃうちゃ熱あるぞ。そんなんの仕事できるわけねーだろ」

「熱…？」

がーーーーん!!!!

俺、熱あんのか！知らなかった！というか、どうりでフラフラしてるわけだ。今俺は物凄く納得してしまった。畜生、アカネに抗議してやるつもりだったのに何もいえなくなっちゃったじゃないか。

俺は強制的にベットのの中に戻された。

あー不覚…まさか昨日のビールがこんな尾ひれをつれてくるとは…。

それにしてもアカネは何で家にいるんだろう？いつも朝早く出勤しているのにこんなジャストタイミングで家にいるなんて何だかおかしい。

俺がそのあたりを聞いてみると、なんとということか、アカネはさらっと「休んだ」と言った。

「だってさー、ほっとけないでしょ。熱39度近くあんだぜ？駄目駄目、そんなの俺が気になって仕事できないっての」

アカネはそう言いながら、いつも全く手付かずになってるせいでピカピカのまま保たれてるキッチンで、何やらゴソゴソしだした。それからおもむろに携帯を取り出してピコピコ操作し出す。

「今おかゆ作ってやるからちょっと待ってるよー」

「え…ア、アカネが作んの!？」

「あれ、もしかして俺じゃ不満？」

「ち、違っけどっ！だって…その、いつも料理なんかしないじゃん。おかゆなんて作れんの？」

「いやー作ったことないけど、取り敢えずレシピ見ながら作る！白い米も調達してきたし」

どうやらアカネは、さっきコンビニに行っていたらしい。良くある真空パックの白米だ。アカネは携帯でレシピを見ながらちよつと唸ってキッチンの主になっている。

アカネのおかゆ…。

うわー…。

俺はベットの中で包まって、ただの熱のせいだけじゃなく、顔がぼわんと熱くなってた。キッチンにアカネの後姿。それが、慣れない料理なんかをしてる。しかもそれ…俺の為…ってことだよな？

うわー、うわー、うわーっ。

俺はどうしようもなくなつて、アカネの後姿を見るのさえ恥ずかしくなつて、毛布を思いっきり引き上げた。熱の籠った毛布の中、心臓の音がドクドク鳴ってるのが分かる。何だかおかしくなりそう…。

でも、そんな俺のドキドキなんかお構いも為しに、アカネ作のおかゆはサクツとできあがってしまった。

俺は否応なしにアカネの顔を見ざるを得なくなつて、絶対赤いはずの顔をアカネの前に晒す。熱があつて良かった。じゃなきゃ、カモフラージュできない。でも熱が出なかつたら、こんなふうにはアカネのおかゆなんか食べられなかつただろうな。俺はどっちに感謝していいのか分からなくなる。

「はい、あーんして、あーん」

「ばっ…！自分で食べれるしっ！」

「何だよー良いじゃん、やらせろよ。はい、あーん」

「あ、あーん…」

…死ぬ。

…悶絶死だ。…あ、やらしい意味じゃなくて！純粹に！

子供になつたみたいにあーんって口を開けて、アカネの運んでくるおかゆを食べる。おかゆなんてただでさえ味無いのに、ドキドキして更に味なんて感じられない。一応、美味しいとは言つてみたものの、俺には何かが口の中にあるって感覚しか分からなかった。

アカネは、ベットの端に腰を浅くかけて、よしよし、なんて笑つてる。あああ、やめろおお…。その笑顔NG！しかも近いから！体全体近すぎですから！

俺はもつと病が重くなるんじゃないかなろうかと言う中で、とりあえず

おかゆを完食して、それから薬を飲んだ。あとは寝れば良い。そうすれば取敢えずこの恐ろしいほどのドキドキ感からは解放されるだろう。

と思ったけど、悪いことに、全く眠気が襲ってこない…。

「あの、さ。アカネ、ありがとう。もう俺、大丈夫だからさ。部屋戻れよ」

「は？やだよ、そんなの」

「なっ！何でだよっ」

「だってそりゃ……—あ、ちょっと待った」

どうやら携帯が鳴ったらしく、アカネはごめんっていうジェスチャーをしながら携帯に出る。中途半端で終わってしまった会話に俺は手持ち無沙汰になったけど、元々部屋に帰れと主張してたわけだし、まあこのまま途切れた方が良いのかな、なんていう気もした。

…が。

「里美ちゃんも来るの？うわーマジかー！あーそうだよな…でも、今日だろ？ああ、ああ、うん。あー…そうなんだけどさ、今日はちよっと…」

「…」

俺はアカネの声がなるべく聞こえないように、毛布の中に包まった。

里美…って、誰だろう。

どういふ話か分からないけど、とにかく途切れ途切れの言葉からすれば、アカネは今日誰かに誘われてて、その場にその里美ちゃんっていうのが来るわけだ。アカネの声のカンジからして、その里美ちゃんに会いたいつてというのが伝わってくる。でも誘われてるのは今日だから…。

つまり、俺のせいで行くのを渋ってるんだ、アカネは。アカネは親切すぎるんだ。

俺のことなんか構わないで行けば良いのに。だってそっちの方がだいぶ重要だし、俺なんて風邪ひいたってどうってことないんだから。

俺の感情は、さっきまでとは正反対に少しづつ冷めていった。明らかに、里美という女の子の名前が効いてるんだ。

アカネが近づいてきたらドキドキしっぱなしでそんなに近づくなんて思ってくせに、いざ離れそうになると心細くなる。俺は、そんな俺の身勝手さがどうしようもなく嫌だと思った。

俺は、意気地なしだ。

結局ユリちゃんとの約束も守れてないし、アカネに気持ちを打ち明けることも怖くて出来ない。それどころかアカネがこの家から出ていってしまったらどうしようって、それすら怖がってる。

アカネ曰く39度近くも熱がある俺は、病気の時特有のアレかもしれないけど、どんどん意気消沈していった。病気の時って、何だか弱気になるもんだけど、今の俺はそれにプラスして今までの言動が拍車をかけてる。最悪だ。何が最悪って、俺自身が最悪なんだ。

俺がもし可愛い女の子だったら…いや、そこまで望まない。せめて普通に女の子だって分かるくらいの外見だったらこんなふうに悩まなかったのかな。そうしたら、アカネに好きだって言えてたかな。

いや…違うか。

外見のせいにして逃げてるけど、結局俺は、心が弱いつてことなんだろう。どうせ選ばれることなんて無いって思ってるんなら、外見なんて関係ないはずだもん。当たって砕けるだもん。俺はそれすら出来てない。

俺は熱の籠る毛布の中でそんなことをずっと考えてた。頭はぼーっとしていくはずなのに、悲観的な考えばかりが急激に頭の中を旋回した。

「ああ、じゃあな。…おい、ジュン？」

電話が終わったのか、アカネがそんなふうに声をかけてくる。

俺は寝たふりをして、毛布の中に包まっていた。今アカネの顔を見たら何だか…何だか、俺…。

でも…そうだ、これだって逃げてるんだよな。俺は、俺の気持ちか

ら逃げてるんだ。

「アカネ…」

俺は、おもむろに毛布から顔を出した。

意気消沈してた気持ちがグルグルしてたせいか、俺の表情は病人そのものみたいになってたんだろう。アカネが心配そうな顔をして俺を覗き込んでくる。

ベットにつかれたアカネの腕を、俺は、ギュツと掴んだ。

「アカネ、俺…」

「どうした？」

「俺…」

目は、逸らさなかった。  
逸らせなかった。

「俺、アカネの傍にいたいよ……」

俺の視界には、何も言わないまま、少し驚いたふうに俺のことを見

てるアカネの顔が映っていた。

## 09：シンデレラ

シンデレラっていう童話がある。かなり有名な童話だし、誰だって一回は読んだことがあるだろう。

シンデレラは不幸な星の元に生まれたけど、魔法の馬車とガラスの靴でパーティに出かけて、王子様の心を掴んだ。でも、12時になって魔法は切れてしまったんだ。王子様は残されたガラスの靴を手がかりにして、シンデレラを探した。そうして、とうとう二人は幸せに結ばれたというわけだ。よくシンデレラストーリーなんていう言葉が使われるけど、あれはひとえに、雇われ者のシンデレラが王子様の心を掴んだということが、一発逆転の大成功を収めるということに通じているからなんだろう。

だけど、世の中の全てがシンデレラのようにはいかない。

なかなか無いことだからこそ、そういう話は夢を乗せて語り継がれるんだろう。といっても童話は作り物であって伝承とかではないから、強いていえばそれは、人々の「夢」なんだろう。絶対無理だっと思うようなことがたくさんあるけど、もしかしたらつかめるかもしれないっていう、僅かな可能性のために。

俺には魔法使いのおばあさんもないし、だからガラスの靴なんかも登場しやしない。だけど、それでもシンデレラみたいな一発逆転が出来たらいいのになと願ってる。

いや、むしろ反対かな？

もしかしたら今こそ魔法がかかっている瞬間なのかもしれない。真

実の俺の姿を隠す魔法。本当は女だっていう、本当の姿を。この魔法が切れたら、俺の気持ちも破れるのかもしれない。そうだ、12時になって魔法が切れてしまうのと一緒に。だけど俺にはガラスの靴は無いから、きつとその後のハッピーエンドはないだろう。魔法は解けたままで、そのまま雇われ者のまま生きることしかできないのかもしれない。

でもさ…。

もしあのとき魔法が切れなかったら、シンデレラはハッピーエンドになってたかな？あれはもしかしたらなるべくしてなったのかもしれないじゃないか。

もしかしたら、魔法は切れるべきなのかもしれない。

そういえばあの王子様は、シンデレラの本当の姿を見ても嫌がったりはしなかったんだな。迎えにきて、この人だって分かって、それがどんな姿であつても、王子様はシンデレラを選んだんだ。

魔法は…やっぱり、切らなきゃいけない。

例えシンデレラみたいになくなくても。

俺は、三日三晩寝込んだ。

さすがに家にずっといると退屈で、ぼんやり天井なんか見てもあまり良い思考なんかできやしない。職場、大丈夫かな。シフトで迷惑かけちゃったな。俺はそんなことをぼんやり考えながら、一人きりの部屋で息をつく。

アカネは、最初の日、ずっと傍にいてくれた。

俺がふいに口に出したあの言葉のせいかもしれないし、元々そのつもりでいてくれたのかもしれないけど、とにかくアカネはずっと傍にいて、寝ている間もベット脇に椅子を寄せて座っていてくれた。俺はそれが嬉しかった。だけどずっと俺に付き合わせるわけにもいかないし、翌日からはちゃんと仕事に行ってもらうことにしたんだ。最初は、回復するまで休むって言うてくれてたけど、さすがにそれはできなかった。

そういえばアカネと香水の話をしたんだっけ。  
ずっと気になってたアカネの香水。

ブルガリってブランドの香水なんだって言うてた。俺、この先、きっとあの匂いを嗅いだらアカネを思い出すんだろうな。

逆に、アカネも俺に、俺のつけてた香水のことを聞いてきた。例の、ユリちゃんから貰ったやつだ。バニラみたいな甘い匂い。だけど俺はあの香水の名前も知らないし、自分で買ったわけでもないから、正直にそれを話した。貰いものだから分らないって。そしたらアカネは、女の子からのプレゼントだろ、って言うて笑った。間違っではないから反論はしなかったけど、俺を男だと思ってるアカネからすれば、なんか違う意味に取れたんだろうな。

俺は職場の香水売り場で、ブルガリの香水をぼんやり眺めた。結構種類がある。アカネのつけてたのは、この内のどれなんだろう。

「失敗しちゃいました？」

「あ、ユリちゃん」

につこり笑ったユリちゃんが、俺の隣に立って、香水のシヨウケースを眺めながら「やっぱりなかなか上手くいかないものですね」なんて言った。ユリちゃんの期待にも応えられなかったことが、何だか悪いことのような気がしてくる。

俺が休んだ初日、職場に事情を連絡したアカネは、兄貴の名前を名乗ったらしい。なるほど、って思った。確かに、ウチにいるのが兄貴じゃなくてアカネだったっていうことを知ってるのはユリちゃんしかない。職場の人たちは、兄貴の家にいる、ってところで情報がとまってるんだ。

仕事の合間、ユリちゃんには事情を話しておいた。別に報告しなきゃいけないってこともないんだろうけど、何となくその方が俺が安心できる気がして。

だけどさ、ユリちゃん。

俺はもう、魔法を切るって決めたから。ちゃんとやるよ。うん、そう決めたんだ、俺。

「あ、これ社割で」

「はいはいー。って、あれ、園部さんが？へー香水。珍しいね」

「ははは、いやー気分転換ですよ」

「おーそうかあ。これ良いよなあ。俺も欲しいんだよな。あ、けどこれ男モンよ？良いの？」

「ははは、良いですよー。ユリちゃんに相談したらこれが良いって」

仕事にはさっぱり身が入らなかったけど、とりあえずブルガリの香水を買った。これはアカネ用じゃなくて、アカネと離れたときの慰め用だ。はは、俺って何だかチキンだなあ。

「私も社割お願いします」

ユリちゃんも、便乗するように社割で香水を買った。黒い瓶の大人っぽい香水だ。ユリちゃんは社割でそれを購入すると、何故かそれをそのまま俺の手の中に落とした。

「はい、園部さん。これ私からのプレゼント」

「ええ！？ユリちゃん！？」

「貰って下さい。あのね、私、園部さんのこと大好きだから」

「だ、大好きって!」

「えへへー、これは上手くいきますようにっていうおまじない」

ユリちゃんの笑顔はめっちゃ可愛かった。あー俺が男だったらユリちゃんに絶対惚れてたなあって思う。本当にありがとう、ユリちゃん。俺はユリちゃんのプレゼントの香水を握り締めた。

その香水は、ランコムの「マギーノアール」という香水だった。大人っぽい匂いがする。

マギーノアール、意味は”夜の魔法”というらしい。ユリちゃんが教えてくれた。

俺はシンデレラのことを思い出す。夜の魔法。そうだな、俺はとうとう魔法を切ろうと思ってるけど、これをつけて勇気を出そう。

俺の、最後の魔法だ。

アカネの帰りは、やっぱり遅かった。

俺はそわそわして、今日こそ言うぞって思ってたからものすごくそ

わそわしてて、落ち着こうと何度も深呼吸した。

いつかこんな日があるのかもって思ってたことが、とうとう今日やってくるんだ。本当はあの居酒屋の日に言うつもりだったけど、今度こそ本当にやってくる。アカネがどんな反応を返そうとも、俺が魔法を切って、その後の時間っていうのは確実にやってくるんだ。

俺は、ほぼ90%アカネが目の前から消えてしまうことを考えていた。

「ただいま」

待つこと2時間、アカネはようやく帰ってきた。はっとして時計を見ると、あと15分で12時になるうところだった。

心臓がドクドクして、そんな緊張の中に、マギーノアールの匂いがふんわりと漂ってくる。

「お、おかえり！今日も遅かったな」

「ああ、まあな。…あれ、珍しいな。今日はまだ寝る準備してないんだ？まあ丁度良いか。実は俺、ジュンに話があつてさ」

「あ…あの、俺もちょっと話が…」

アカネが座ろうとしないから、俺も突っ立ったまま、廊下のところ

で会話が始まった。背の高いアカネを見上げる。金髪の髪から僅かに覗いた耳元のピアスがキラリと光って、俺は一瞬ドキリとした。

先に言えよ、と言われて、俺は逆に、アカネが先に言えよ、と切り替えた。アカネはそれを拒絶しなかった。

そしてアカネの口から出てきた言葉に、俺は真っ白になったのだった。

「俺さ、出て行くことに決めたから」

「…え!？」

「元々いきなり転がり込んできたような身分だし、そっから考えるとそれが正当だろうなって気もしてさ。あ、でも元もとの理由は仕事の都合なんだ。バンド忙しくなってきたから、詰めるために近くに住めって言われて…まあそうだよなーってさ」

「え、じゃあ…もう、決定なのかよ？悩んでるとかじゃなくて、それで決定なのかよ？」

「だから、決めたんだって。短い間だったけど、ありがとな」

「は…」

…なんだ、これ？

俺は頭が真っ白で、暫く口を動かさなかった。俺が恐れていたことが、俺の白状なしにやってきたんだ。でも、思えばそういうことだ

ってありうるんだ。俺は今までそんなこと考えもしなかった。

俺が男だと思われてるからとかそういうことじゃなくて、そもそもこれは、ただの偶然で出てきあがってたってことなんだ。どうして気づかなかったんだろう。

「それで、お前の方は？何？」

「俺は……」

アカネの告白がショックすぎて、俺は、自分が女だとかそんなことはどうでも良いような気にさえなってきた。だって今更これを白状したところでどうなる？アカネは、どうせいなくなるんだろう？

マギーノアールが、ふわっと香った。

何だか、物凄く空しくなった。

「俺……」

「どうしたんだよ、ジュン？」

アカネが、俺の好きな仕草で顔を覗き込んでくる。

もう良いだろう？

どちらにしたって俺は、アカネとは離れなくちゃいけないんだから。

「アカネ、俺さ…俺、本当は…」

その時だった。

「ジュン…！いるか…！ちょっと今日泊まらせろ！」

突然玄関のドアが開いて、怒声が響いてきた。それは紛れもなく兄貴の声だった。しかもこの声のカンジは確実に機嫌が悪いときのものだ。

やばい！

俺は直感的にそう感じてハッとしたけど、そのときには既にもう遅かった。兄貴は俺の顔を覗き込むようにして近くにいたアカネの姿を見て、一瞬にして頭に血を上らせたんだ。

「おまつ…浜瀬！？」

「園部！？」

「浜瀬が何でこんなところにいんだよ！テメーまさか…ふざけんなよ！人の妹に手出してんじゃねー！！」

「は！？妹！？」

アカネがこの上なく驚いて俺の顔を見てくる。俺はそんなアカネと兄貴とを呆然と見ることにしかできなくなってた。

な…んだ、これ…？

こんなところで？

魔法が——切れた…？

「やっぱテメーなんか泊めるんじゃない！くそ、テメー許さねえぞ浜瀬！！」

「ちょ、ちょっと待て！待てって園部！」

兄貴がアカネの胸倉を掴んでる。それを見て、ああ、止めなきゃ、違うんだって言わなきゃ、って思うのに体が動かなかった。あの驚いたアカネの顔。あの顔。…もう魔法は切れたし、アカネはどうせいなくなるっていうし、俺は…。

…だけどき、せめて…。

俺の口から伝えたかったよ——。

「あ！ちょ…ジュン！？」

「ジュン！！」

気づくと、俺は二人の間をすり抜けて駆け出していた。とにかく遠く、とにかく遠く、どっかに消えてしまいたかった。そして出来れば、ほとぼりが冷めて帰ってきたとき、この家からアカネの物が全て消えていれば良いと思った。

あのブルガリの匂いも、無くなっていれば良い。

## 10：魔法が切れた後

ユリちゃんの電話番号を聞いて置いて置いてよかった。

俺は迷った挙句にユリちゃんに電話して、その晩は泊めてもらうことにした。俺があんまりしょんぼりしてたからだろう、ユリちゃんには心配してくれたけど、全部を話したら、大丈夫ですよ、といって笑ってくれた。

ユリちゃんのいれてくれたあったかい紅茶で、少しだけ気が休まった。それに、ユリちゃんといろんな話をしていたら、随分と肩の力が抜けた。感謝してもし尽くせない。

「じゃあ園部さん、私とデートしましょうよ。美味しいものいっぱい食べて、買い物もいっぱいするの。私、園部さんの服選んであげる！きつと似合うの見つけますから」

「うん、ユリちゃんとだったらいつでもOKだよ」

「本当に？やったー、園部さんとデートだー」

無邪気にはしゃぐユリちゃんに、俺もつられて笑顔になる。そうだな、こういう時はそんなふう遊ぶのが一番かもしれない。

きつと疲れてたんだ。あんまりずっとアカネのことを見てたから。でも、きつとこれで楽になれる。楽になれるんだ。

異変が起こったのは、それから2日過ぎたあのことだった。俺は未だにユリちゃんの家で厄介になって、そろそろ家に帰らなきゃな、なんてことを思ってた。アカネは荷物を纏めたかな。できればすっかりきれいになってれば良いのに。そんなことを思ってた仕事をしるときだった。アイちゃんが俺の方に駆け寄ってくる。

「園ちゃんー、超ヤバイ！今さ、G l o o m y R a i nのギター来てるー！本物来てるー！」

「グル…？」

俺は少し考えて、それからハッとした。

そうだ、G l o o m y R a i nって、アカネのバンドじゃんか！  
ってことはつまり、アカネがここに来てるってことか？

「超イケメンなんだけどー。園ちゃんも見てみてよー。アカネ、携  
番教えてくれないかなー？」

俺はドキッとした。

誰かの口からアカネって言葉を聞くななんて思わなかった。けど、思えばそうだ。アイちゃんなんかにとっては、アカネは有名な存在だったんだ。

「あ、こっち来た！やば、マジカッコイー」

「え…」

アイちゃんの言葉に、俺はつい顔をそっちに向けてしまった。アカネは、縁なし眼鏡をかけて、あの長い金髪を揺らしている。手に何かを持って、辺りをキョロキョロしてたアカネは、化粧品コーナーのユリちゃんに声をかけた。

うわ…なんか不思議な感じだ…。だって、アカネとユリちゃんが話してるなんて…。

ユリちゃんはキョロキョロ売り場を見回すと、最後に俺の方を指差した。それと同時に、アカネが俺の方を向く。目が、合った。それから…。

アカネが、俺の方に歩いてきた。

「園ちゃん、こっち来るよー」

「あ、ああ、うん…」

自分の担当売り場そっちのけでレジにいるアイちゃんと一緒に、俺はアカネがやってくるのを見てた。もうこの際アイちゃんにレジを任せてどこかに行きたいと思ったけど、何だかそれはできなかった。目も、離せない。

やがて、近くにやってきたアカネが、俺に向かって何かを差し出した。

「すみません。コレ、下さい」

「あ…は、はい」

俺は慌てて、商品をスキャンしようとする。が、アカネが突然「あ」と言い出して、俺はその手を止めた。

「すみません、もう一個欲しいものがあるんで…ちょっと良いですか？」

「え！？あ、はい…」

「でもどの辺に売ってるのかな。ちょっと分からないんで、どの辺にあるか案内して貰っても良いですか？」

「あ、はあ…」

俺はアイちゃんにレジをお願いして、レジの中から出る。何だかすごく他人行儀な気がして嫌だったけど、あんな出来事の後だったし、今は仕事だし、どんなものをお探ですか、と俺は目を逸らしながら聞いた。するとアカネは、携帯ストラップなんですけど、なんて言った。

携帯ストラップ？…まあ売ってるには売ってるけど、何でそんなもの買っただろう。俺はそんな疑問を持ちつつもアカネを案内する。携帯ストラップの売り場は一番端っこだ。

「あの、こちらになります」

「どうも。じゃあ…どれにしようかな？店員さんはどれが良いとおもいます？」

「え？」

「携帯ストラップ、どれが好きですか？」

「え…えっと…」

サクッとレジに帰ろうと思ってたのにそうすることもできなくなっってしまった。何だよ一体。そんなこと俺に聞かなくなっただけ…。

俺は取敢えず、一番無難そうな合皮のストラップを勧めた。アカネだったらこれが一番似合いそうだなって思ったからだ。でも、例えばアカネがこれを付けたからといって、俺がそれを見ることはないんだろうな。…なんて、考える。

「そうか、じゃあこれにしよう。じゃあ、このストラップ2つ下さい」

「は？」

「あれ、何かおかしいと言いました？2つ、お願いします」

「あ…は、はいっ」

俺はそのストラップを2つ手に掴んだ。そうしてレジに向かおうとする。

が、そのとき。

「……なあ、店員さん。傍にいたいなんて言ったくせに、自分からどっか行っちゃまうヤツの心理ってどんなもん？」

背後から、そんな言葉が聞こえて、俺は思わず立ち止まった。

「本気で傍にいたいって思ってくれてんなら、俺の前から消えたりすんなよ。電話しても出ないし、待っても帰ってこないし、俺どうしたら良いんだよ。どうしたらお前は帰って来てくれるわけ？」

「…お客様、お会計——」

「俺はお前の傍にいたいんですけど」

少し怒ったような声音で、そんな言葉が響いた。俺の心臓はドキンと鳴って、もう少しで心停止でもしそうなカンジだった。

傍にいたいって…アカネが？俺の傍にいたい、って？

まさか、そんな…！

それは俺にとって信じられないような言葉で、だけどもちやくちや嬉しい言葉だった。何だか告白されたみたいで、無意識に顔まで赤くなってくる。ヤバイ。ヤバイよ。今仕事だし、そうだ、こんな話してる場合じゃ…！

「あ、あの、もうお会計で宜しいですよねっ」

「こっち向けよ、ジュン」

「お客様、あちら——」

「こっち向け」

グイツ、と腕を掴まれて、俺は強制的にアカネと顔を合わせるハメになった。絶対赤くなってる顔をアカネに見られるのが嫌で、俺はすぐさま顔を背ける。俺のバカ！やっぱり逃げてる！アカネはちゃんと俺を向いて話してくれてるのに。

「あ、あの一番下のやつ、ちょっと取って」

「は…？」

「あれあれ、一番下の段にかかってるやつ。あれも買っ」

「え？あ、あれ…？」

いきなりそんなことを言われて、俺は言われるままにしゃがみこんだ。アカネと顔を合わせないで済むから丁度良いやなんて思った俺は最悪だったろう。

俺がしゃがみ込んだ瞬間、隣のアカネと一緒にしゃがみこむ。そして、唐突に後頭部をわしづかみにされた。え？って思ってたはずアカネの方を向いた瞬間、突然アカネの顔がドアップになって俺の目に映し出された。と、同時に、唇に生あったかい感触があった。

え…う、うそ！？

そんな、そんな——え、ええええ！？

驚いて目を見開いた俺の前で、アカネが笑った。

「大好き」



## 11: YES

茫然自失…まさにそんな気分。

俺はどっかの低脳ロボットになったみたいに、カタコトの言葉で仕事をしていた。多分俺のしゃべった言葉は全部カタカナだったろう。オキヤクサマ、コチラデヨロシイデスカ…カタカタ、みたいな。

アイちゃんにはとてもじゃないけど言えなくて、取敢えずユリちゃんには報告しておいた。最初俺はカタカナで喋ってたからユリちゃんは何を言ってるのかさっぱり分からなかったらしい。

「本当ですか！？やったー園部さん良かったですね！私も嬉しいです！」

「俺どうしたら良い！？なんかもう頭が真っ白で俺…」

「どうって、1つしかありませんよ。園部さんはアカネさんのことが好きなんだし、アカネさんだって園部さんのこと好きなんだし、これって両想いじゃないですか。普通に付き合えば良いんですよ」

「つ、付き合うつていったって…でもアレ、そういう好きじゃないかもしれないし…単に家に帰らせるための手段だったのかも、とかさ…」

「そんなことないですよ。絶対違いますって。だって相手の職場でキスなんてしませんよ、普通」

「キッ…！そ、そうだけどっ！」

俺はまた恥ずかしくなってきた。思い出すだけでも恥ずかしい。

アカネのキス……。

うわっ、もー駄目！思い出すとヤバイっ！

「とにかくもう一度会って、ゆっくり話し合ったら良いと思いますよ。絶対良い方向にいきますけどね」

ユリちゃんのにっこり笑った顔が、何だか天使に見えた。ありがとう、ユリちゃん。俺は頑張るよ。今度こそちゃんと、アカネに言う。

今更だけど、好きなんだって、そう言ってくるよ。自分の口から。

レジに向かう前に、アカネが言っていた言葉を覚える。家で待ってるから必ず帰って来い、と。

だから俺はユリちゃんの家にはサヨナラして、自分の家へと帰った。  
アカネはもう荷物を纏めたかな。そう思っていたけど、実際帰ってみるとそうでもなかった。とはいえ、半分くらいは荷物がなくなっている。それを見て、アカネが出ていくことには代わりがないんだな  
ってことを、俺は実感していた。

アカネの帰宅は、やっぱり遅かった。待つこと2時間、やっぱりい  
つも通りだ。

ただいまー、と声がしてガチャ、とドアが開いた瞬間、俺の体はビ  
クツとした。昼間あんなことがあったばかりだから、やっぱり恥  
ずかしい。だけど何故か、怖いと思うことはなくなっていた。

「お、居た居たー。ちゃんと帰ってきてくれて良かった。じゃあ…  
えっと、これだ。はい、これはジュンの分な」

アカネは、帰ってくるなり俺に何かを差し出した。見てみるとそれ  
は、昼間ウチの店で買った携帯ストラップだった。2つって…じゃ  
あ、1つは俺へ渡すために買ったってことか？

「俺とお揃いな」

「えっ」

「あ、何だよソレ。嫌？」

「ち、違う違う！そんな全然っ！嫌とかじゃなくて…その、なんて

「うか…あ、ありがと」

「どーいたしまして。今時サムいとか言うなよ。なんか良いだろ、いつも一緒にいるみたいじゃん。俺そういうの結構好きなんだよな」

「へえ…ってオイ！なんかそれ恥ずかしいんですけどっ」

「そうか？」

アカネの携帯には、既にあのストラップがぶらぶらとぶら下がっていた。ああ、本当にお揃いなんだ…。なんか…良いのかな、俺…。俺はアカネのくれたストラップをまじまじ見てた。アカネとおそろいのストラップ…。

「なあ、ジュン」

アカネが俺の脇に腰を下ろしてきて、さっきまでとは違って、ちょっと真面目な声を出す。俺はアカネを見て、何だか急に切なくなつた。何でだろう。

「俺、この家を出てくけど、ジュンとはずっと一緒にいたいって思ってる。昼間のことは嘘じゃないからさ。お前を連れ戻すためとか、そういうことじゃないから。ちゃんと、好きだから」

「そ…そんなこと…」

恥ずかしさと、切なさが、入り混じってる。何なんだろう、この感覚。良く分からない。嬉しいはずなのに切ないって、どういうことなんだろう。

「だけど、ジュンのこと女の子だって気づかなくて本当にごめんな。俺って最低な男だよな。気づけよってカンジ。でも、ジュンが女の子だって知ったとき、正直嬉しかったな。」

「え…なんで？」

「だってさー。白状するけど、俺、結構悩んでたんだよな。ここ最近ジュンのこと見てるとなんかこうムラムラしちゃってさー」

「ム、ムラムラー!？」

「そうそう。だから俺は、自分でもしかしてバイなのかなって思い悩んでたわけ。もういっそ男でも良いから押し倒そうかとおもったけど、ジュンがトラウマになるかもなーとか思うとそれもできないしさー。ホント困ったぜ、あれは。勃っちゃったよ、どーしよーとか色々…」

「ちょ、ちょっと…あの、話題が濃すぎるんですけど…」

「あ。ごめん」

な、なんだそのムラムラって…ちょっと…。俺はクラクラしてしま

った。でもそのおかげで、切ないか思ってた気持ちは薄れたらしい。どっちかというと恥ずかしい気持ちが勝ってしまった。

「でもま、要するにアレだ。それだけジュンのことが好きってこと分かった？」

「…はい」

「取敢えず俺はそういう気持ちでジュンのこと見てるから。ずっと言えなかったけど、こうやってちゃんとと言える日が来て良かった。あの日、園部が来なかったらこんなふうにできなかったかもな」

「あ！そつえば兄貴…！」

そつだ、すっかり忘れてたけど、兄貴はどうなったんだろう？

アカネに殴りかからんばかりの勢いだったけど、何とか収まったってことなのかな。気になってその辺りを聞いてみると、アカネは問題ないってふうに笑った。その理由を聞いてみると…なるほど。そういうことか。ものすごく納得である。

どうやら、兄貴の彼女というのは、アカネのバンドのファンだったらしい。その彼女にマジ惚れしたウチの兄貴は、友達のアカネに頭を下げて何とか近づけるようにお願いしたという…まさか兄貴にそんなエピソードがあったとは知らなかった。

「俺はキューピッドだからな。園部が俺のこと殴れるわけないって

の。それに俺、実際にジユンに手出してないじゃん？俺には非が無いし」

「え…でもさ、それってその…兄貴の彼女、アカネのファンだったらさ、今もやっぱり交流があったりすんの？」

「んーまあ連絡先は知ってるけど、別にわざわざ連絡は取らないかな？それにその子、ファンっていつてもヴォーカルのファンだからな。俺のファンってわけじゃないから」

「なんだ、そっか…」

「あはは、今ちよつとホツとしただろー？ジユンってホント可愛いなあ」

「なっ！」

そんなわざわざ口に出さなくても良いのに！  
したよ、そりゃしたよ、ホツとしたさ。  
だって…。

「仕方ないじゃん！だって俺…アカネのこと…す、好きだし…」

「だろ？なー？…って、は！？ちよつと待った、もう一度！」

「うるさいなっ！何度も言わせるなよ、恥ずかしいじゃん！」

「だって聞こえなかったしー。いやー残念残念。で、何？ワンスモ

アプリーズ？」

「だっ、だから！す…好きだって言うてんだろこのバカーー！！」

俺は恥ずかしさにまかせてアカネの頭をポカポカ叩いていた。何ていう奇行だよ、俺…よっぽど恥ずかしいじゃん…。だけどアカネは、あはは、って笑ってた。俺のポカポカを避けながら、面白がってるふうだった。

「そうだよなーだって俺が女連れ込んだとき泣いてたもんな。あれってやっぱ、俺に他の女とやって欲しくないから泣いてたの？」

「ば、バカじゃないかお前！？そんなこと聞かよ普通！」

「いや、だって、何でこんなことで泣くんだろーって思ってたからさ。でももしそうだったらすげー納得。あー惜しかったなあ。やっぱあのままジュンのこと襲ってれば良かったかも」

「ちよっ！だから何でそーなるんだよ！？」

何だかもうわけわかんなくなってきた…。なんなんだ、この緊張感の無さは！？ものすごくアカネのこと好きで、こんなことになったらどうしようとか、俺じゃあ絶対無理だとか、すごくすごく悩んだことがバカみたいに思えてきた。

でも…それもこれも、アカネが俺を拒絶しないでいてくれたからなんだよな。だから俺はこんなふうにいられるんだ。

俺はやっぱり外見上男っぽくて女の子みたいなどこなんて微塵もなくて、本当に何も無いけど、それでもアカネは俺を好きだって言ってくれた。こんな嬉しいことって他にないよ。可愛い子なんてほかにもいっぱいいるし、アカネのこと好きだって思う子だって絶対多いのに、そんな中でこんな俺を選んでくれたんだもんな。

今でもまだ信じられないけど…でも、嬉しいよ。

俺が、初めて好きになった人。

「じゃあ、取敢えずさ。改めて言うけど…俺と付き合ってくれるか？」

ううん、なんて言うわけないじゃん。

答えは、うん、しか無いよ。

## 12：王子様の本性

晴れて…というか、俺とアカネは付き合うことになった。

この事実を一応兄貴にも伝えておいたけど、兄貴はしきりと、あの時浜瀬を泊まらせたりしなければ良かったと嘆いてた。ほんと、よく言うよ。俺が女だつてことを熟知したくせにアカネを泊まらせてやってくれないなんて言っただのはどのどいつだよ？そう思ったけど、今ではそれも笑い話な気がした。

アカネはというと、今はバンドメンバーのご近所に住んでいる。俺の家からは電車で3駅くらいあるところだ。

それでもアカネはたまにふらりと家にやってきて、やっぱり此処が良いなーなんて言っただけで泊まっていたりする。俺には、それがちょっと嬉しかった。

ところで…。

最近になって分かったことだが、アカネってやつはどうも一途すぎて、どこかプツンしてるところがあるらしい。俺はそれを嬉しいと取れば良いのかどうか時々悩んでしまうことすらあるんだけど…まあユリちゃん曰く、良い彼氏じゃないですか、らしい。

アカネの奇行。

やたらめったら俺の職場にやってくる。

アイちゃんがその度に奇声を上げてるけど、さすがのアイちゃんもアカネの性格には呆れてしまったらしい。というのも、携帯電話の番号を聞いても一切教えない、バンドの話をしようとしてもその話は駄目ね、と蹴る。じゃあ何を話してくるかといえど…。

「もうー園ちゃん聞いてよー。アカネ超ウザいんだけどー」

「え？どの辺が？」

「だってー」俺彼女が一番大切だから他の女とか興味ないしー」とか言ってるの。彼女が可愛いすぎて毎日幸せだとか言っちゃってるの。マジウザいー。イケメンなのにウザすぎ」

「あ、あはは…」

そう…アカネはいわゆる”デレデレ系”だったわけで…。

最近流行りのツンデレってやつがあるけど、アカネはツンがないから、ただのデレデレだ。アイちゃん曰く、いつも鼻の下が伸びてるらしい。そんなことをファンの前で言っているのかねって思うけど、アカネは一切お構いなしってカンジだ。

まあ俺にとってはアレだ…デレデレっていうより…デレサマって感じだ。デレサマって何だよって？つまりアレだ。いつもはデレデレしててバカっぽいのに、いざって時は微妙に俺様で強引ってこと。

実は…そういうところが好きだったりするんだけどさ。

だけど実際アカネは、ステージに立ったりするとシャキツとなる。まあそういうふうに見せてるのかもしれないけど、最近対面したバンドメンバーの話によると、キレたりする時はマジで手がつけられないらしい…俺も気をつけよ…。

「園部さん、また来てますね、アカネさん」

「はは…ほんとにな、なんつーヤツだあいつは」

「でもあれ、園部さんのこと見に来てるんですよ。さっきも言われましたもん、園部さんにちょっかい出してる男いない？いたら即教えて？って」

「そんなのいるわけないっつーの！どこまで心配性だよ、あいつは」

「いたらどうするんですかって聞いたら、即殺す！って言うてましたよ」

「でたよ…」

最近のアカネの口癖はまさにそれだ。何故か目がギラギラしてるんだ、アカネのやつ…。で、俺が社員と話してるときなんか、じーつと見てんの。怖いから！本当に！ユリちゃんは「愛されてる証拠ですよ」なんていうけどさ…。

ユリちゃんの話は、アカネにも話してある。だからアカネも、俺とのかをユリちゃんには話してるらしい。俺はそれをユリちゃんから聞くんだけど、何だか変なネットワークが出来上がってるって

わけだ。

アイちゃんについては、とりあえず秘密にしてある。だからアカネが俺の職場にきたとき、アカネが話すことは、アイちゃんに対してとユリちゃんに対してでは全然違うというわけ。

「でも、なんか悔しいなあ」

「何が？」

「だって、園部さんとデートできるって思ってたのに、アカネさんに怒られちゃいそうですもん。行きたかったなーデート」

「え？何で？大丈夫だよ、行こうよ」

「本当ですか？やったー楽しみだー。私、アカネさんに自慢しちゃおっと」

ユリちゃんは本当にそれをアカネに自慢したらしく、アカネはアカネで物凄く悔しがってたらしい。だけど俺がユリちゃんのことをすごく信頼してるって知ってるから、泣く泣く、じゃあ楽しんでこいよ、とか言ってたらしい。おいおい…君らね…。面白すぎるから、ほんと。

とりあえず、こうして俺の初恋は実ったんだ。

ちよっとおかしな気もするけど、そんなところも含めて、俺は今すごく幸せだって思う。

俺の携帯電話には、アカネとお揃いのストラップ。

すりきれるまで、一緒にいたいな。

それで、もしすりきれたら、今度は一緒にストラップを買いにいきたい。

そうやって、ずっとずっと一緒にいられたら良いな。

俺は、アカネを好きになってよかった。

今、心から、そう思う。

## 12：王子様の本性（後書き）

最後まで読んでくださった方がいらっしやいましたらば、どうも有難うございました。

自己満足で続きを書こうと思っていますので、宜しければまたいつかお付き合いくださるとうれしいです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2884f/>

---

CINDERELLA

2011年3月20日06時34分発行